

キレやすく実力もある  
シンジ君

覚め

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

思いつきです。よろしく。どれくらいキレやすいかって言うと「できっこないよミサトさん！」が「出来るわけねえだろ脳使えサル!!」になるくらいキレやすい。

いや、できっこないよもキレてるっっちゃキレてるけど。

# 目次

第12話  
第11話  
第10話  
第9話  
第8話  
第7話  
第6話  
第5話  
第4話  
第3話  
第2話  
第1話

94 81 74 66 58 51 43 35 25 16 8 1

第23話  
第22話  
第21話  
第20話  
第19話  
第18話  
第17話  
第16話  
第15話  
第14話  
第13話

194 183 175 165 156 146 139 129 122 108 101



## 第1話

## 第3新東京市

シンジ「ああっ！いつになったらこの人は来るんだ！」バンツバンツ

サキエル「…」

シンジ「なんだあのデカブツ!?こちらら親父からの手紙一つだけで飛んできてやったつてのにさ!ああもう!うおっあぶね!」

UN重戦闘機「特攻!ぐおっ!」チュドーン

シンジ「あのへり、UN重戦闘機じゃねーか!?こうしちやいられん!逃げるに限る!」  
そう思った矢先、突然車が回ってきた。いや、回りながらきた。これまた幸いと車に乗つかろうと飛んで、車の上にしがみついた。んで、この車普通に急ブレーキ踏みやがって俺が飛ばされたつてわけ。交通違反だ!?!知るか!非常時だぞこちら!!

「君が、碇シンジ君!?!」

シンジ「そうですけど!?!」

「良かった!ごめん少し遅れたつて言うかあんなアクロバティクな動きして怪我してない!?!」

シンジ「しとらん！早く逃げましょ！！」

「えええ！！」

ネルフ本部

：逃げ先が親父の勤務場所だったとは。さて、どうしたもんかな。俺の目の前に居る変なロボット。デカイ。ほんつとーにデカイ。なんか金髪の人（リツコと言うらしい）がすごい説明してくれてるけどすごい入ってこない。とにかくすげーってことはよくわかった。

シンジ「…ていうかそっちは…」

ミサト「ああ、私、葛木ミサト！とりあえずシンジ君にはこのエバーに乗ってあの使徒を倒してもらおうわけ！」

ゲンドウ「シンジ」

シンジ「…え、なんであいつ俺の名前知ってるの？」

ミサト「一応貴方の父親なんだケド…」

ゲンドウ「説明は聞いたな。ならば、エヴァに乗れ。出なければかえ」

シンジ「あーうんうん乗る乗る。どーせ乗らないと変な手使ってくるし」

リツコ「司令の行動には慣れてる訳ね」

ゲンドウ「先生…」

冬月「お前は父親として恥ずかしくないように生きてくれ…」

ミサト「じゃあ早速準備を！リツコ、お願い！」

リツコ「任されたわね」

ミサト「良いんですね、司令！」

ゲンドウ「ああ。かま」

ミサト「シンジ君、今はそんなきつちりと準備できないけど、これだけは着けて！」

シンジ「なんだこのヘアピン」

ミサト「後はリツコに聞いてね！」

リツコ「…なんて身勝手なのかしら」

シンジ「とりあえずこれで良いんですかー？」

リツコ「え、まだ乗る方法何も説明してないのだけれど」

ミサト「準備は良い!？」

第3新東京市

シンジ「俺、参上！」バーンッ

サキエル「!？」

シンジ「こいつのどこを狙えば良いんだヒントくらい寄越すのが基本だろうが！」

ミサト『シンジ君、歩くことだけを今は考えて！』

シンジ「…田舎で空手習ってた俺を舐めんじゃねえ！」ブンツ

サキエル「キィア!?」ゴンツ

ネルフ本部

ミサト「回し蹴り!？」

リツコ「あの位置から距離を詰めての…あり得ないわ」

ゲンドウ「ガタガタガタ

冬月「おい、大丈夫か!？」

地上

「なんだ、ただのかいだけのデクの棒じゃねーか。まだデクの木様の棒の方が役に立つぜ！このままあからさまな弱点であろう赤い点をぶち抜いてやるぜ！こっちは爺ちゃんから「上京した時の護身術」とか言われてかれこれ5年は空手やってんだバーカ！」

シンジ「…いける!!!」ゴンツ

サキエル「ィア！」フィールド

シンジ「んな!？」

ミサト『ATフィールドは通常攻撃じゃ破れないの!』

シンジ「そんなバリア有りかよ!？っクソ！しね！」ゲシイッ



サキエル「!?」ゴンッ

シンジ「そのクソバリアごと押し込んでやる！」ゲシッゲシッ

サキエル「キィ…!?」ゴンッゴンッ

ネルフ本部

リツコ「…エヴァのスペックを大幅に超えてるわ」

ミサト「え!?」

リツコ「…一体どういう事なの…?」

ミサト「暴走って事!？」

リツコ「それとは違うのよミサト。もしかしてシンクロ率が?」

ギター「シンクロ率80%って…俺の名前…」

ミサト「シンクロ率80%!？」

リツコ「プラグスーツは着てないはずなのに…!!」

地上

シンジ「喰らえ手刀！」スンッ

サキエル「キァ!？」スパンッ

ミサト『今よ！赤いところをそのままやっちゃって!』

リツコ『…切ったの…!』

シンジ「このまま肘で…突くツツ!!」ズツ!!

サキエル「きいいいあああああ!!!!」モギユルジユル

ミサト『自爆する気!?!』

リツコ『コアはもう致命傷を受けたはずなのに!』

その日、俺はクソ痛い思いをした。ダニみたいに生きても死んでも迷惑掛けるやつなんか俺は嫌いだ。あの後結局自爆されて、エヴァってロボットの上半身が少し削れたっぼい。すげーな、エヴァって。あんなどでかい爆発食らっても削れるくらいで済むなんて。

ネルフ本部（のどつか）

シンジ「あー!一人暮らし〜!」

ミサト「良いの?お父さんと暮らしたり…は無理か」

シンジ「顔すら知らないのに?」

ミサト「それもそうよね…でも…中学生が一人暮らしているのは…」

シンジ「別に良くないですかね」

ミサト「良くない!から…そうだ!」

なんだ、その『これ名案だ!』って顔は。顔にマーカで描かれてるくらいわかりやすいぞ。待て、なんで本人に許可を取らずに同居するんだ。おかしいだろ!?

ミサト宅

ミサト「…そういうええなんだけど」

シンジ「なんです?」

ミサト「シンジ君は5年空手やってたのよね」

シンジ「そうですね」

ミサト「…昔5年やつてた友達がいたんだけど、シンジ君並みにはならなかったわよ」

シンジ「田舎だからそこらへんの不良を見つけては空手で骨折らせてましたね」

ミサト「血の気多くない?」

そんなこんなで俺の第3新東京市生活が始まる。はつきりと言うかなんと言うか、  
どーでも良いことに親父と再会したし長年やつてた空手が変な時に護身術としてでは  
なく攻め手として生きたし…人生ってむずかしー。

翌日 学校

トウジ「悪いな転校生。お前を殴らに」バギイツ

シンジ「…話はそれだけ? そうだったらもう俺戻るけど」

ケンスケ「ト、トウジ!? 大丈夫か!? トウジ!」

シンジ「殴るって言葉出したのお前の方だから…まあ正当防衛って奴だな」

ケンスケ「トウジィィ!!!」

## 第2話

中学校 屋上（シンジ君落ち込みシーン全カット）

綾波レイ「緊急招集、先に行ってるから」

シンジ「…誰…？」

一方その頃トウジ達

シエルター

トウジ「あの転校生、ほんと腹立つなあ」

ケンスケ「ま、トウジも八つ当たりに近いことしたんだしさ」

トウジ「そ、それはちやうやろがい！」

ケンスケ「そもそも文句を言うなら、お試し操作もさせずに出撃させたNERVさ」

トウジ「なんやて？」

ケンスケ「屋上で愚痴ってたよ。『初陣で初操作で犠牲者0は死にゲーを初見でノーマスでクリアしろってことと同じだ』って。まあ実際合ってるけど」

トウジ「ぐっ…：そんならまあ、仕方ないんか…いや！でも」

ケンスケ「でもも何も無い…：チツ、外の景色が見えないな…」

トウジ「なんや、まだ試しとったんか」

ケンスケ「…こうなりや直に見に行つてやる。トウジ、手伝えよ」

トウジ「見つかったらどないすんねん…」

ケンスケ「逃げ遅れたから山に登りました、で良いんじゃないか？」

トウジ「点呼でバレとるで」

そしてシンジ君

NERV本部

シンジ「…はあ…クソが、何が汎用人型決戦兵器だ…良くてデクの棒だろ…」

ダメだ、イラついてしまう。上ではどーせドンパチやつてんだ。落ち着け、落ち着け…今回は前回とは違う。武器を持って出撃できるんだ。それだけでもマシさ…って待て。ミサイル効かないのにどうやってやるんだ？ガトリングだろ??

シンジ「ミサトさん」

ミサト「何？」

シンジ「エヴァの武器ってATフィールド破れ」

マヤ「もう来てます!!」

ミサト「エバー、発進!!」

シンジ「…いつもこれだ…!」

地上

ケンスケ「お、来た来た！」

トウジ「本当に勝てるんやろな」ヒソヒソ

シンジ「：お前本当いい加減にしろよ：」

シヤムシエル「ききりゆあ」

シンジ「あの世でセンター踊ってな！」ババババババ

シヤムシエル「きいあ！」バーンッ

ミサト『馬鹿！煙で姿が見えない！』

シンジ「！黙れ脳筋ブタ娘！テメーが使えって言ったんだろ！試し打ちもさせずに！」

ミサト『なんですって：！』

シヤムシエル「きりゆあ！」ピシンッ

シンジ「触手！」バシンッ

トウジ「な、なんや!?あのガトリング砲、効果あらへんで！」ヒソヒソ

ケンスケ「ミサイルでもダメー!ジ喰らわぬ奴に巨大ガトリング砲なんて！」ヒソヒ

ソ

シンジ「こんのクソツタレが！」ガシッ

ミサト『ちょ』

シヤムシエル「!?」

シンジ「この汚ねえ触手も：掴んじまえば意味ねえだろ！」ブンツ

ミサト『巴投げ!!』

リツコ『きつちり山の方向へ飛ばしてるのもポイント高いわね』

トウジ「おいおいこつち来るで!?」タツタツタツ

ケンスケ「ヤバイヤバイヤバイヤバイ！」タツタツタツ

シヤムシエル「ぎいああ！」ドシャーんツッ!

ケンスケ「か、神様く！」タツタツタツ

トウジ「アホ!こう言う時だけ神頼みすんなや！」タツタツタツ

シンジ「ここから：飛び膝蹴りじゃあ！」ビョーン

ミサト『空中じや身動きが!』

リツコ『しかも低い!いくら速くても空中じや意味がないわ!!』

シヤムシエル「きびいああ!!」ブンツ

予想通り!奴の触手攻撃は数打てば当たる戦法ではなく的確にその場で対応していく所を選ぶ!!この場合腹部に触手が突き刺さる形をこのクソツタレ海老は考えているはず!!そこを逆手に取る為にこの微妙な低さで飛んだのよ!!

シンジ「隣のビルにキーンツク！」ガギイゴリゴリツ

シヤムシエル「!?」スカッ

シンジ「逃さん！」ガシッ

ミサト『掴んだあ!?!』

リツコ『でも、このままじゃ装甲が…!』

シンジ「ぎつ…喰らえ膝についてる変な角！」グイッグサツ

シヤムシエル「ぎいやああああ!!」ズパッ

シンジ「いやああああああ!!?!」

青葉（ギターの人）『左手、親指以外が切られました！右手は手首ごと!』

ミサト『さっさと倒さないからよ!』

シンジ「お、俺の右手と左手が!!やりやがったなテメー!こんにやろー!」ゲシイッ

シヤムシエル「きいあ!」ギユルツブンツ

ミサト『飛ばされた!?!』

リツコ『こつちも丁寧に山に飛ばしてくれたわね』

シンジ「…?おいなんかいるぞ!」

トウジ「バレた!」

ケンスケ「ヤバイ!!」



なんやかんやあつてこいつら、仲間になりました。テレレテツテター…じゃねえけどさ。いや、まあそんなことよりだ。いつの間にかケーブルが切られていた。内部電源に切り替わつてて、それも後3分。これじやリアルウルトラマンじゃないか。殺すしかないな。

シンジ「やるじゃねーかよ…」

ミサト『撤退よ！シンジ君!!』

トウジ「逃げろ言われとるで！」

ケンスケ「カメラが〜！カメラが、カメラが〜!!」

シンジ「こんの…クソ野郎が…コアに刺さつてる変な膝関節のアレもつと深くまで突

き刺してやる！」

トウジ「ええ!?!」

ケンスケ「逃げるんじゃないの!?!」

ミサト『なんですつて!?!』

シヤムシエル「きいりいあ！」ブンツ

シンジ「野生の生物は獲物を仕留めるときに隙ができるんだろ！」ゲシイツ

トウジ「コアに突き刺さってるなんか当たつたで！」

ケンスケ「嘘でしょ!?!」

シンジ「おまけにもう一回!!」ゲシイッ

シヤムシエル「!!」チドバー

トウジ「うわ汚な!!」

NERV本部

ミサト「なんで命令を無視したの？」

シンジ「自分から持たせた武器の使い方に文句を言う人にはなりたくないですな」

ミサト「嫌味のつもり？」

シンジ「…悪口のもりですけど」

…なーんで俺NERV本部きたんだろ。いや、それよりもなんで俺この女と部屋一緒なんだろ。変えてもらおうかな。お偉いさんの父さんに空手でぶん殴るぞ!とか言ってみようかな。それか、お前の企みは全て知ってる!!とか。いや、結構効くだろ多分これ。

シンジ「終わり良ければすべて良しです」

ミサト「こっちは始末書とエバーの修理費と建物の復興で良くないのよ!!」

シンジ「…やる気ですか？」

ミサト「良いわよ!こっちは拳銃」

シンジ「ガキ相手に何ムキになってるんですか。僕帰ってますね」

ミサト「…あゝ!!ムカつく!ムカつくムカつくムカつく!!」

## 第3話

学校

トウジ「何やシンジ、綾波が気になるんか？」

シンジ「まー、父さんと援助交際してるのかなって」

ケンスケ「シンジのお父さんとお!？」

トウジ「あ、あありえん!!綾波がそないなこと、するわけ!!」

シンジ「でも、父さんにだけは表情がコロコロ変わるんだよね」

トウジ「そらまあ…うーん…」

実の息子放つて別の子供に良い顔するとは、それほど綾波のことが好きなのだろう。というより、実の父親の癖してコミュニケーションが一言日記以下の接触ってなんだよ。もうちよつとあるだろ。こう、久しぶりだな、とか。会って一言「エヴァに乗れ」なんだよ。父親か?あいつ

シンジ「そーれーに。あの父親、何を話すわけでもなく無理難題を突然押し付けて来る、おかしいだろーって」

ケンスケ「実の息子としては思うところがある、か…」

トウジ「…よーし！綾波に聞いてみるか！」

シンジ「そんなことしても返事はどーせ父さんと同じ一言日記だよ」

綾波「…」

トウジ「おお!？」

ケンスケ「うわあっ!？」

シンジ「…何、綾波」

綾波「司令のこと、悪くいうのは良くないと思う」

シンジ「あの父さんの肩を持つなんて」パシンッ

綾波「…貴方のお父さんは悪い人じゃないわ」

トウジ「!？」

ケンスケ「あ、綾波！謝りなよ！」

綾波「なぜ？私は悪いことなんてしてないわ」

シンジ「やりやがったな!!」ゴンッ

綾波「いたっ…!」

父さんと親しい奴に『貴方のお父さんは悪い人ではないわ』なんて言われてもお前が親しいからそう言えるだけであってこつちからしたら全くわからんことだっつーの。実の息子放つて息子と同年の女子中学生にいい顔する親父なんてセクハラ親父なん

だよ。

トウジ「ず、頭突き……」

ケンスケ「やっぱり……」

シンジ「こんのポーカーフェイスが……父さんの人形になつてりやテメーは一生金ヅル手に入れるからそう言えるんだろうな」

綾波「そうじゃないわ……」

シンジ「なんだと……!」

ケンスケ「シ、シンジ! 抑えて!」

トウジ「せや! 教室でやることちやうで!」

シンジ「……っ」

ヒカリ(委員長)「ちよ、ちよつと……」

トウジ「!? あ、ああ! 何もあらへん! あらへんで!」

ケンスケ「そ、そうだよ! シンジが転んで綾波にぶつかっちゃってさ!」

ヒカリ「そ、そう……? なら良いけど……」

トウジ「そ、そうやそうや!」

シンジ「……チツ」

自宅

ミサト「…シンジ君」

シンジ「なんですか」

ミサト「レイに頭突きしたそうね」

シンジ「…しましたね。なんか、よくわからない言い分で叩かれましたんで」

ミサト「言い訳は良いの。どうして仲良く出来ないの？」

シンジ「父親と仲良いんで嫉妬しちゃいました」

ミサト「…」

シンジ「それじゃ」

ここに来るまでの間に話していた天然酒樽（ミサトさん）の話から推測するに、父親を出せば何も言われないだろう。多分。まあ、一応言っておくと嫉妬は事実。だけどあんな父親の肩を持ったことに腹が立ったことが理由。よし、嘘はついてない。

翌日 屋上

シンジ「…」

綾波「昨日のこと」

シンジ「…何？」

ケンスケ「綾波、上手く謝ってくれるのかなあ？」ヒソヒソ

トウジ「反抗期とか色々話に出したからイケるんちゃうか」ヒソヒソ

シンジ「…あ、頭突き悪かったな」

綾波「つ…私の方こそ、事情を知らないで…」

シンジ「どーせケンスケとトウジに謝れ謝れ言われたんでしょ」

綾波「…何故、わかつたの？」

シンジ「お前はぜつつつの人に人に謝る人間ではないからだ！」

綾波「分からないわ。もしかしたら、街の買い物だと普通かも」

シンジ「ミサトさんの発言を見るにお前はコミュニケーションが全くと言って良いほど取れない！一言日記レベルの会話しかできない!!」

綾波「…当たり前」

トウジ「よ、ようお二人さん！」

ケンスケ「な、仲直りは…」

綾波「ええ、ちゃんと」

シンジ「トウジ達に言われた通り」

ケンスケ「やつぱりバレてるじゃないか！」

トウジ「なんやてえ!？」

いや、まあ…普通に屋上の出入り口から出るの見えたし。昼休みになっても降りないし。どう考えてもトウジ達が見るために居たんでしょ。でもまあ僕はとても美しい人



間なので相手のお粗末なところは言わないでおくんだ!…多分

綾波「…碇君のお弁当、美味しそう」

トウジ「お、分かるかあ?」

ケンスケ「シンジの料理の腕前はすごいんだぜ!」

綾波「何故、知っているの?」

シンジ「…前、あまりにも多く作りすぎて弁当三つに分けて食おうとした時に」

トウジ「それからはワシらも偶に頂いとるんや!」

ケンスケ「トウジは購買で買う金が浮くから、だろ?」

トウジ「うぐっ」

綾波「私も食べてみたいわ」

シンジ「嘘だろ」

綾波「これから、よろしく」

トウジ「進歩やな!」

ケンスケ「やはり、パイロット同士仲良くしなきゃ、だろ?」

シンジ「…いや、まあ良いけど…」

綾波「?」

シンジ「金が…」

綾波「何故？」

シンジ「何故って、そりやお前…アレだろ」

綾波「お給料は、貰ってないの？」

シンジ「え？」

トウジ「シンジは世界を救うのってボランティアでやつとんたんか？」

ケンスケ「今からでも求めようと思えば求めれるんじゃないか？」

シンジ「…今日は早退する。裁判起こしても貰う」

綾波「そうすれば、お弁当が貰えるのね」

シンジ「給料の未払いは犯罪だから…証言は綾波に任せるぞ」

綾波「分かったわ」コク

…まさか、まさかだ。使徒よりも身近に、使徒よりも凶悪な敵が居たとは！驚きだ!!  
…さて、ゲンドウに問い詰めてみよう。ゲンドウに問い詰めても無理だったら綾波に頼もう。どうにかして泣き落としで…いや、副司令も使えるか…

NERV本部

シンジ「こんにちはー！」

ミサト「シンジ君!?!学校はどうしたの!?!」

シンジ「綾波が給料貰ってるって聞いたんですけどー！」

リツコ「?シンジ君も給料はもらってるでしょ?」

ミサト「…あつ」

リツコ「まさかミサト貴女」

ミサト「やっぱあ…!」

シンジ「払ってくれないと綾波の分の弁当が作れないんで、よろしくです」

ミサト「え!?仲直りしたの!」

シンジ「お前給料の話からの逃げ道見つけたからって調子乗るなよ?」

ミサト「うぐっ…」

ゲンドウ「葛城二佐」

ミサト「え!?あ、ハッ!」ビシィッ

ゲンドウ「今の話は本当か?」

ミサト「あ、いや、それは…」

ゲンドウ「本当か?」

ミサト「う、嘘…で…」

ゲンドウ「…シンジ」

シンジ「何?」

ゲンドウ「これからは、お前に手渡しで渡そう」

シンジ「今までの分もお願いね」

## 第4話

ネルフ本部

ミサト「また来たわね」

シンジ「10何年ぶりに出てきたら続々と出てくるって、趣味のあった陰湿な奴らみたいですね」

リツコ「…シンジ君、エヴァに」

シンジ「何で今回はミサイル撃たないんですか？」

リツコ「撃つても無駄だと先の戦いで分かっているからよ」

ミサト「そう。というわけでシンジ君。出撃準備」

シンジ「承知」

着替え室

シンジ「毎回毎回脳死したかのように出る出る出る…ゲシユタルト崩壊するっての」

しっかし、さっき見た使徒、どうやって攻撃するんだ？今までの奴らって近距離と中距離…バランス取るためにはここで遠距離出さなきゃっしょ。いや、使徒がそんな順番

良いとは思わないけどさ。使徒もアホだよ。モグラみたいにすりや見つかっても攻撃できないのに。

地上

ミサト『エバー、発進!!』

シンジ「さーて、今回もどうにかすつかなー!」

青葉『目標、内部に高エネルギー反応あり!』

ミサト『何ですって!』

シンジ「えまってそれってつまりどういう」

ラミエル「きいいいいいいい……! チュドオオオオオ

シンジ「ほがああああああああ!」

ミサト『シールド展開!』

日向（青葉とセットの人）『シールド展開! 防げてます!』

シンジ「あがつ……! はあ……! って、何だこれ!? 外れなくなってるじゃねーか!」

マヤ（オペレーターの中で唯一の女）『目標、再び高エネルギー反応!』

リツコ『不味い!』

シンジ「テメーらそればかりじゃなくてこの肩にくっついてるの外せって」

ラミエル「きあああああああ……!!」ジユドオオオオオオオ

シンジ「眩しっ!？」

日向『シールド破壊されました!』

ミサト『パイロットの強制射出は』

リツコ『パイロットが死ぬわ』

ゲンドウ『…頃合いか…』

冬月『使えぬ部下は早々に切り捨てるか。冷たいな』

ミサト『!ATフィールドは!?!』

マヤ『展開中!原型をかりうじて留めてます!』

シンジ「おごあああああああ!!!」  
「テメーらもう許さあああああ!!!」

リツコ『貴方、立場危険じゃない?!』

ミサト『…っ地区ごと回収して!』

病室

…んで、結局僕は病院へと。綾波に看病されても嬉しくはないんだが…とりあえず、  
 どういう状況だったかを聞かねばならない。ほとんど記憶がないというのも嫌なもの  
 だ。というか、出撃直後、ビーム砲喰らったことくらいしか記憶にないんだが…

綾波「…起きたの」

シンジ「その通りで」

綾波「そう。それじゃああの使徒を倒す作戦を。碓、綾波両パイロットは、本日、19:30、第2ターミナルに集合。20:00、初号機、及び、零号機に付随し、移動開始。20:05、発進。同30、二子山第2要塞に到着。以降は別命あるま」

シンジ「いや、それは良い」

綾波「何故？貴方は作戦を知らなければならぬはず」

シンジ「あの酒樽女：葛城はどうなった」

綾波「この作戦でまた撤退したら、人類ごと滅ぶ。だから猶予が与えられた」

シンジ「オツケ。じゃあ、さっさと第二ターミナル行ってるわ」

綾波「その格好で行くの？」

シンジ「…それもそうだな」

綾波「それに、ご飯」

シンジ「寝てたからいらん」

…しかし、あまりにもコテンパンにやられたせいで無性に腹立ってくるな…あの野郎、第六の使徒なんかさっさとコテンパンにして終わりだな。終わり。

綾波「後、作戦に関係があるものとして」

シンジ「ん？」

綾波「…碓、綾波両パイロットはNERV本部で狙撃の練習」



シンジ「それ第二ターミナルで集まる必要あるか…？」  
NERV本部

ミサト「…それでは、始め！」

シンジ「一発」パシユンツ

綾波「こんなの初めて」パアンツ

シンジ「…発射あ！」パアンツ

ミサト「二発目は許可してないわ」

二子山第二要塞

シンジ「…要するに打ち抜けてことね」

リツコ「そうなるわ」

ミサト「…また、エヴァに乗ってくれてありが」

シンジ「酒樽が感謝…!?やはりこの作戦失敗するんじや…」

ミサト「ここでボケなくて良いのよ」

リツコ「…ミサト。多分マジで言ってるわよ」

ミサト「え？」

シンジ「…というより外したらどうなるんですかね」

リツコ「あまり考えたくないことね」

シンジ「というより、綾波はどうするんで？」

綾波「使徒が初号機を攻撃した時に初号機を守る役目」

シンジ「：お前も大変だな」

綾波「碓君ほどじゃないわ」

：少しは冗談がわかるようになって来たのか？変な言い方で返された。やはりポーカーフェイスというより世間知らずと言った方が良かったか。いや、世間知らずというより生まれたての大人だな。いや、もしそうだったら誰からあの返し方聞いたんだ!?

シンジ「：とりあえず、撃つか：！」

ミサト『じゃあ、全ての電力を集めて』

日向『とつくの昔から集めてます』

ミサト『流石よ、日向君』

マヤ『全電力、後2分で集まります』

ミサト『ちよつち遅いわね：』

シンジ「：お、ミサイル発射した：」

ラミエル「ぎいあ！」  
チュドンツ

日向『砲撃、破壊されました!』

ミサト『悟られないよう、間髪入れずに次も発射!』

シンジ「…お、溜まった」

リツコ『全電力が集まったわ。ミサト、誤差修正の計算は任せて』

ミサト『よろしくね、リツコ。シンジ君、発射準備は良い?』

シンジ「勿論」

ミサト『誤差修正はこつちでやるから、シンジ君は集中して撃つこと。良い?』

シンジ「ガッテン承知の助け…侍!」キユドオオオオンツ

ラミエル「!?きあああああああ!!!」チドロー

シンジ「…やったか?」

マヤ『目標、内部に高エネルギー反応!』

ミサト『全員衝撃に備えて!』

ラミエル「きあああああ!!!」ブジュツドオオオン

シンジ「ほあっ!?」ドンガラガッシャー!!!ン

…いや、あれで生きてるとか、わけわかんないんですけど。綾波も流石にあれで死ななかつたとは思わなかつたらしく、反応が遅れていた。馬鹿め、死んだ時の確認は死ぬまでやると漫画でも言われているだろうに。

ミサト『…皆、大丈夫?』

日向『大丈夫です。ついでにケーブルも全て無事、また繋げば撃てます』

ミサト『オーケー。砲身は？』

マヤ『まだ行けます。けど、後一発打てるかどうか…』

ミサト『確認不要。撃つわよ』

シンジ「やってくれたなオイ…テンメー、もう少し手心つてもんがあるだろうが…！」  
青葉（いたっけ？）『初号機も定位置に戻ってます』

ミサト『準備は万端つてわけね…もう一度、集めるわよ！』

シンジ「つたく…GだかDだか分からんがよ、その装備も外れて…こちとら素の状態  
で撃つんだぞ？テメーもその体晒し出せよ…」

日向『ヒューズ交換…砲身の冷却も終わりました』

マヤ『後は電力だけです…』

シンジ「よしきた！」

ミサト『電力以外は揃ってる…どうやってコアを出そうか…』  
マヤ『!!目標、または高エネルギー反応!』

ミサト『レイ!』

綾波「!」ダッ

シンジ「ポーカーフェイス!」

ラミエル「きいいあああああああ!!!」 チュドオオオオオ

綾波「ぐっ…!!」

シンジ「シンジ13、後は電力だけだが…」

マヤ『電力、整いました!』

ミサト『シンジ君!』

シンジ「落ち着け…誤差修正も変な追加要素でやられてた…撃つとするなら…」

綾波「は、早く…っ!」

シンジ「ここ!!」ドギユウンツ

ラミエル「!」ジヨガアアアアア（漏らしてません）

マヤ『目標、沈黙!』

ミサト『やったわ!これでクビ回避!』

ネルフ本部

ゲンドウ「…」

冬月「会話がダダ漏れだということを知らんのか…全く」

二子山第二要塞

シンジ「おいおいおい大丈夫かおい!」ガチツシユー

綾波「…っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…」

シンジ「すぐ撃つたさ!ほれ、助かったんだから喜べ喜べ!」

綾波「…喜ぶ…?」

シンジ「喜怒哀楽の喜! 笑え笑え!」

綾波「…フフツ…そうね…」

NERV本部

ゲンドウ「!?!」ガタガタガタガツタガツタ

冬月「碓…」

## 第5話

墓場

シンジ「…」

ゲンドウ「久しぶりだな。2人でここにくるのは」

シンジ「母さんも苦しいだろうね。親父がこんなクソ野郎だったなんて」

ゲンドウ「…ユイの目の前だ。少しは取り繕わんか」

シンジ「父さんはいつもそんな感じなのに？」

ゲンドウ「ユイは、嘘を吐かれるのが嫌だったからな」

シンジ「お前嘘ばっかついてるのに？」

ゲンドウ「給料の件については嘘ではなかっただろう」

シンジ「チツ」

帰り道

…あの親父、母さんの前でもずーつとあんな感じだったかな。母さん苦勞して死んだんだろうな…これだからゲンドウは…全く。母さんの旧姓を自分につけたい気分だ。ただ、調べる余地がないんだよな、これが。全く、ゲンドウのやつは用意周到がすぎる

ぜ

ミサト「どうだった？会っちゃえばどうとでもなったでしょ？」

シンジ「相変わらずのクソっぷりで安心しました」

ミサト「あ、あはは…」

シンジ「て言うか、なんです、あのクソでかい建物。ありました？海上に」

ミサト「え？つて、使徒じゃないのアレ!？」

シンジ「マジかよつてオ!？」

ミサト「こちら葛城ミサト、今第3の少年を輸送中！」

シンジ「今ここで連絡すんのかよ!？」

その後、頭文字D並みに荒い運転をした挙句、新型のエヴァが飛来し、使徒を見事倒し、僕の出番はなかったとき。つーか、普通にあんな運転するかよ…頭ぶつけたつての…

戦闘後、エヴァが運ばれてる場所

ミサト「説明するわ。ユーロ空軍エースパイロット。第二の少女、式波・アスカ・ラングレーよ」

トウジ（いたよね？）「2号機つて赤いんやなあ」

シンジ「うわっいつの間に!？」



ケンスケ（いたよね？）「ひどいなシンジ…」

シンジ「うおっ!？」

アスカ「あれが、えこひいきで選ばれた最初のパイロットってわけね」

ミサト「そうよ。久しぶりね〜アスカ」

アスカ「久しぶりねミサト〜！クビになりかけたって聞いたけど」

ミサト「うぐっ…そこまで情報が回っていたとは」

シンジ「よー分からん人間だな」

トウジ「ありやシンジとは絶対合わん性格やで」

ケンスケ「シンジとぶつかることがないと良いんだけどなあ…」

アスカ「で、親の七光りで選ばれた第3の少年は？」

ミサト「えーつと…」

シンジ「こいつ」

トウジ「うおっ!?! な、なんでワイが!？」

アスカ「あんた？フンっ！あんたばかあ!？」

トウジ「な、なんやてえ!？」

ケンスケ「完全にとぼっちりだよ…」

シンジ「ま、手が出たらなんとかなるでしょ」

アスカ「エヴァに乗れず、戦えなかったことを恥じることもすらないなんて！エヴァのパイロット失格ね！」

トウジ「な、なんかよーわからんがワイやないでえ！」

アスカ「じゃー誰だつてのよ！」

トウジ「シンジや！あの、カメラ構えてる奴の隣！」

あ、トウジのやつ裏切りやがった。仕方ない。どうにかして逃げ切るか。いや、まずこれ逃げ切れるのか？完全にキレてるよ。こいつやばいよ。こうしてる間にもすごい罵詈雑言浴びせてくるし。ただし僕は紳士だ。堪えろ、堪えろ…

アスカ「おまけに！」スツ

シンジ「!?」ドンツ

アスカ「無警戒！あんた本当にパイロットなんでしようねえ!?」

シンジ「はあ…」

アスカ「ため息吐いたの!?信じらんない！」

トウジ「あ、ちよ、待てい！」

ケンスケ「お、落ち着いてシンジ！今をやり過ごせばNERV本部以外では交流ないはずだろ!?!」

シンジ「その通りだよケンスケ…だからこそ腹立つんだよ！」

アスカ「!?ふ、フンツ！何よ！自分が危なくなったら逆ギレって訳!!」  
ケンスケ「ほ、ほら！抑えて抑えて！」

アスカ「掛かつてきなさいよ！どーせ勝てっこないんだから！」

シンジ「だつてさ、ケンスケ」

ケンスケ「…わ、わかつたよ…」

トウジ「え、ええんか!？」

ケンスケ「仕方ないだろ？」

アスカ「さあ！やってみなさいよ！」

シンジ「調子に乗んなよ」ガシツ

ミサト「…!!し、シンジ君！それまでに」

アスカ「髪掴まないでよ！」

シンジ「…もー知るかバーカ!!!」ブチブチイッ

アスカ「いやあっ!？」

ミサト「シンジ君！何をしてるか」

シンジ「うるせえ！」ゲシイッ

ミサト「ふぎやつ」

そこからはキレすぎてあまり記憶にないが、やりすぎたと言うのが妥当だと、その日

の夕方に病院でトウジに言われた。その場に居合わせた加持とかいう人間がスタンガンで僕を気絶させたとか。やるな、加持…ちなみに式波は涙目になりながらも気絶した僕を蹴っていたらしい。

自宅

シンジ「たっだいまー」

アスカ「あら？ようやくお目覚めってワケ？」

シンジ「…段ボールだらけだな。すんげー汚い」

アスカ「分からないの？アンタはお払い箱ってことよ！」

シンジ「マジ!?やったー！」

アスカ「はあ!?パイロットの座を惜しむ間も無く明け渡すつての!？」

シンジ「チツうつせえなお前ほんと」

ミサト「言い忘れてたわね。シンジ君とアスカは今日から一緒の家よ？」

アスカ「うそお!？」

シンジ「ま、ミサトさんが作れる料理と言ったらインスタントだけですもんね」

ミサト「ぐぬっ」

アスカ「ええ!？」

そのあとしばらくアスカが奮起して「じゃあ私が作ってあげるからナナヒカリとは別

の家ね！」と言い出して作り始めたが、あまりにも酷い有様になった。丸焦げのハンバーグ、全く味のない味噌汁によくわからない灰らしき物。仕方なくまた僕が作ったこれじゃ猿のほうはまだましだな：

アスカ「この私が料理ができないなんて：いや、日本式のに慣れてないからよ！」

シンジ「じゃあ慣れたら出来るってことか」

アスカ「あぐっ」

シンジ「じゃあ、猿以下の式波さんは、今から猿よりマシになってもらうため。家で食べる料理は全部自分で作ってね」

アスカ「猿以下!?あのね!猿にはない知能ってもんが私には」

シンジ「あいつら自分で食材集めて食うんだよ?わかる?お前何?取り柄は何?ユー口空軍エースだったね。それで、エヴァに乗れたね。それだけだね」

アスカ「何よ!十分すごいでしょうが!」

シンジ「お前、ずっとインスタント料理食ってくの?」

アスカ「はあ!?!」

シンジ「はあーっ話にならん:」

ミサト「ちよつとシンジ君?言い過ぎじゃない?」

シンジ「元カレ見つけたからって照れ隠しにキレてる奴には何も言われたくねえんだ

がな」

ミサト 「!?ち、違うわよ! っ、どこでそんな情報」

シンジ 「リッコから綾波に行つて僕のところへ」

ミサト 「リッコお!？」

## 第6話

## 海洋研究所

ケンスケ「すごい！セカンドインパクトで汚れた海をセカンドインパクト前の水に戻すという神の如き実験を一部だけでも見られるなんて!!」

トウジ「ありがとな、シンジ」

シンジ「お礼は加持つて人に伝えてな」

綾波「：加持つて、誰？」

アスカ「あんた、さっさと帰ったから知らないんだっけ」

と、見学しに来たわけだがどうにもここからがめんどくさいらしい。加持さんに他の人より早めに教えてもらったが、殺菌しなければならぬ為に暑い風に吹かれたり変な白いの付けられたり寒い風に吹かれたり変な液体に沈められたりするらしい。海洋研究所：野蠻じゃねーか

加持「さー、殺菌していくぞー」

シンジ「はあ：：」

綾波「殺菌：あれ？」

トウジ「なんや綾波、なんか知つとんのか？」

綾波「少しだけ」

トウジ「ほーん？」

馬鹿めトウジ、俺を身代わりにしたことを恨むが良い。

加持「まずは…暑い風に吹かれてもらう」

トウジ「なんやてえ？」

ケンスケ「白いので良いんじゃないのかよ…」

アスカ「フンっ甘えね」

綾波「これが、ペンペン？」

シンジ「セカンドインパクト前の生き物なんだとさ」

加持「スイッチオンだ！」カチツ

シンジ「あっつざあ!!」

アスカ「ひいいいあいいああ!!」

綾波「…」

トウジ「あつ!あつ!」

ケンスケ「…心頭熱せば火もまた涼し…無理!」

加持「次は水だ!」



ケンスケ「!?」

加持「えーと、次は…冷やして水に沈めて…終わりだな!」

ケンスケ「カ、カメラは…」

加持「それはもう預かってるぞー」

数十分後

…死ぬかと思った。何だあれは、ていうかあれからずーつと言葉通りのことが起こったぞ。水に入つて風に吹かれて水に入つて…他のことがあつたような気もしないけど、あまり思い出したくない。綾波は終始無言だった。所々笑いそうになつてたけど

シンジ「っはあー!」

トウジ「死ぬかと思うたで!」

ケンスケ「これに見合う対価が…!」

アスカ「何よ、あれくらいで音を上げて」

綾波「セカンドも」

アスカ「何よ!」

綾波「貴女も、音を上げていたわ」

アスカ「…っく!!うっさいわね!」

シンジ「お前の方がうるさいわ…」

トウジ「なんか変なの被ってる奴おるで！」

ケンスケ「亀って言うらしいよ！ていうか被ってるじゃなくて背負ってるだろ!!」  
トウジ「50歩100歩やー！」

シンジ「…ペンペン…」

ペンペン「クワッ！クワワワッ!!」

水槽の中にいるペンギン達「クワワ！クワワ！クワワ！」

アスカ「餓鬼どもが騒いじやって…」

綾波「貴女も」

アスカ「また!？」

綾波「貴女も騒がしいわ…w」プルプル

アスカ「何笑ってんのよ！」

綾波「クツ…wごめんなさつ…こういう時、こういう顔したら良いのか…w」  
アスカ「思いつきり笑ってんじやないのよ!!!」

シンジ「綾波」

綾波「何…w」

シンジ「サルは」

綾波「…!!」バンツバンツ

アスカ「何でサルって言葉に反応して笑ってんのよ…」

シンジ「サ…サル…は…くっw」

アスカ「…もしかしてサルって私のこと?」

トウジ「…何であいつらあんないがみ合つとんのじゃ?」

ケンスケ「式波が綾波に笑われて、それをフォローしに行つたシンジも笑いかけてるんだよ」

トウジ「ケンスケ…お前よー聞こえたな」

ケンスケ「まあね」

いやー笑つた笑つた。と笑いすぎて腹が痛いくらい笑つたのでさっさとお昼ご飯にする。綾波は式波のことを言わない限りは大丈夫そうだ。さすがは、クラスで一番笑わせるのが難しい女。綾波でもあんなに笑うのか…

トウジ「とわあーっ!」

アスカ「あぐっ…美味しいわ…悔しいけど」

ケンスケ「あの9割人造肉が、調理次第でこんな味になるとは!」

加持「シンジ君…台所に立つ男はモテるぞ?その性格を少し丸めれば、だけどな?」

シンジ「…周りにやべー女がいる限りは、この性格を改める必要もないと僕は思います」

ケンスケ「だつてさ、式波？」

アスカ「え、な、何よ!? 私がやばい女だつて言いたいわけ!？」

トウジ「事実やろ」

アスカ「なんですつてえ〜!!」

綾波「…」ウーン

シンジ「綾波、口に合わなかつたらさっさと云つてくれれば」

綾波「お肉、嫌いな」

アスカ「人間は生きてるもの食べて生きてんのよ! ありがたく食べなさいつての!」

グググ

トウジ「い、意外やな…! お前さんの口からそんな言葉が出るとは…あ!」グググ

ケンスケ「こんな美味しい肉を食べないなんて…勿体無い。綾波が食べないなら、僕

がもらおうかな」

綾波「それは嫌」

ケンスケ「なんとつ」

加持「…つて2人ともそろそろやめないか」

あ、まだやり合つてたんだ、あの2人。そんな2人を視界の外に追いやつて綾波に弁当魚バージョンであることを伝える。するとどうだろう。魚は肉ではないと言いたい

のか、食べ始めたのだ。いや魚も肉でしょ!?!とりたい方は是非ともヴィーガンに言ってもらいたい。

綾波「…おかわり」

シンジ「おかわりはないが、味噌汁ならある」

綾波「!?!」

加持「…そう言えばシンジ君、葛城がクビになりかけたって泣いてたけど」

シンジ「仕方がないって奴ですよ。あの天然酒樽、人の給料を自分のところで止めてたんですから」

ケンスケ「それで、僕とトウジとシンジとでミサトさんの弁当以外を作ろうとしてもお金が足りなくなってる」

加持「葛城が手料理なんて柄じゃないしな…ん?」

綾波「お給料のお話をしたら、もらってないと言いついて出して」

トウジ「原因はミサトさんゆーのが分かったつちゅーことやな」ボコボコ

アスカ「何でも疑問に思わないのかしら」ボコボコ

加持「…何だ、漫才みたいに話し始めたな君たち…」

シンジ「ご所望であればドリフの大爆笑でも踊ってあげますよ」

加持「知ってるのかい!?!」

シンジ「いえ、知りません」

加持「ああ、そうか…時代的に、もうDVDでしか見れないからなあ」  
ケンスケ「そんなに面白いんですか？」

加持「いや、全然」

シンジ「…」

加持さん、そこまでその番組持ち上げといて面白くない、はないんじゃないですか…  
?

後日、NERV本部

加持「よう、葛城」

ミサト「何よ、今は仕事で忙しいの」

加持「…パイロットの給料を取るのもか？」

ミサト「ブフツ!? な、何で知ってんの!？」

加持「本当だったのか…」

## 第7話

NERV本部

第八の使徒『…』バアーンツ

ミサト「光を歪めるほどのATフィールドとは…参ったわね」

日向「N2も効きませんしねえ」

青葉「エヴァだって宇宙まで手が届きませんし」

リツコ「これまた厄介者ね、ミサト」

ミサト「その上碇司令と連絡も取れない…」

青葉「担当パイロットのうち二人が血の気多いですしね」

マヤ「…エヴァもATフィールド張れるんですよね？」

リツコ「勿論、使徒に対抗する為にはこちらもATフィールドを装備しなければなら  
ないのよ」

ミサト「…それだ！」

リツコ「？」

と、言うことがさつきあったらしい。要するに使徒を手で受け止めろと言うわけだ。

何をしてんだこの人はアーツ！と言うかATフィールド張れるんだ、エヴァって。アスカがさつきから「私1人で」って言うてるけど絶対お前だと人類滅ぶから覚悟しとけよ  
アスカ「だから！人類を救うのは私1人で」

シンジ「じゃ人類滅んだら猿のせいってことで」

綾波「…そうなの？」

アスカ「何でそうなるのよ!!」

ミサト「…まあ、とりあえず一番最初に落下地点に着いたエバーがATフィールドを展開し、使徒を止める。それから後に着いたエバーがコアを仕留める。良い？」

シンジ「それに、エヴァがぶっ壊れたらどうするんです？」

ミサト「へ？」

シンジ「そろそろ世界に代わって父さんがお仕置きをするんじゃないですか？」

ミサト「…それは私に任せてちょうだい。怒られることについては慣れてるから。それじゃ、良いわね？」

シンジ「全責任はアスカになるってことで良いです」

綾波「らしいわ」

アスカ「だからなんでよ!?!」

地上



シンジ「…いや、言われてすぐとは思わないじゃん」

アスカ『当たり前よ！今のうちにATフィールドの練習でもしといた方が良くんじゃないの？ナナヒカリとエコヒイキは』ププツ

綾波『私は出来るから』

アスカ『!?!』

シンジ「…あ、出た」

アスカ『!?!』

さて、作戦開始まで少しある。さっきアスカが頭中に？を並べたと思うが、そんなはどうでも良い。ただ、マジとか言う超有能コンピュータによると、NERV本部直上に落ちてくると言うのだ。確率は99.9999%らしい。マヤって人がこれをシツクスナインって言ってた。

シンジ「勝算も立ち位置も全部が奇跡なレベルで噛み合わさないと勝てないでしょこれ」

ミサト『シンジ君、噛み合う噛み合わないじゃないの。噛み合わせるのよ』

シンジ「うるせえ酒樽」

ミサト『…初号機だけ電源プラグ抜ける？』

リツコ『死にたいのならどうぞ』

アスカ『こんな捻くれ者、要らないんじゃないの？』

綾波『捻くれてるのは貴女じゃないの？』

アスカ『なんですってえ!?!』

ミサト『つて、もうすぐじゃない! え、えと…作戦開始!』

シンジ『最後までグダグダじゃねーか!』

さあ各エヴァ一斉にスタート。3機のエヴァが第三東京を駆けていく駆けていく! いや、ここからじゃ綾波と猿の場所わかんないけどね!?

青葉『使徒、落下開始!』

マヤ『使徒、落下位置ズレます!』

アスカ『何よ! 作戦より速いじゃない!』

シンジ『音速越えのシンジにお任せあれ! 作戦部長!』

ミサト『わか』

日向『ここだ!』ポチポチツ

シンジ『ナイス!』

ミサト『…』

リツコ『アナタ、本当に作戦部長なのかしら?』

シンジ『やはり俺が一番最初よ! ATフィールド、全開だ!!』キユイーン…!

第八の使徒（名前わからん）「くちゅぐちゅあ」パキーン！

シンジ「はうあっ!?」グササッ

アスカ『コアは…あつた!』ドンツ!!

第八の使徒「!!」フィールド！

アスカ『こつちは2本持つてんのよ!』バジンツ!!?

シンジ「綾波さん早く到着してえ!」

アスカ『ここだ!』スカッ

第八の使徒「ギユンツ!」グルグルグルグル

アスカ『んな!?!』

シンジ「そろそろ限界近いんですけどねえ!!」グググツ

綾波『…っ!取った!』ガシッ

アスカ『エコヒイキ!?!』

綾波『早くして…っ!』

シンジ「えーと…!! Be e i l d i c h (急げ)!!」

アスカ『言われるまでもなくう!!』グサッ

第八の使徒「?!?!」

アスカ『もう一丁!!』ガギンツバンツ!

ミサト『やった！』

リツコ『…』

その日の夕方、僕は病院で目を覚ました。聞くとところによるとあの猿だけは大した怪我してないらしい。こちらが手が高温火傷やぞと言いたいが、綾波は手全体が火傷したようなものらしく、文句を言うなら綾波に言わせようと引つ込んでやった。

ミサト宅

シンジ『…』

アスカ「私一人じゃ何もできなかった…」

綾波「遊びに来たわ」

シンジ「元気すぎないか綾波さんよ」

綾波「随分前から私の家に帰ったらカードが無効化されてたもの」

シンジ「…いや、理由は聞いとらん。そんでどうして今更来るんだ」

綾波「今まではベランダから入ってたわ。でも、流星に赤木博士に怒られたの」

シンジ「…あ！すまん渡してなかった!？」

綾波「ええ。そうよ」

シンジ「すまんすまん！水晶玉みてーな使徒が来た時だったから忘れてた！」

綾波「忘れないようにしてくれるかしら」

シンジ「…お前ほんと最近口数増えたな。主に余計な一言が」  
綾波「そう。それじゃ」

シンジ「おうよー」

…あつぶねー…！忘れたままにするところだった！あー、こつわ。どうやら今日知つたっぽいし、リツコさんから酒樽に来ることだけを警戒しなきゃ行けないな…その上猿のメンタル変にポロポロで…四面楚歌かこれ？

シンジ「とりあえず猿！てメー、飯だからでてこい！」

アスカ「…1人にして」

シンジ「なんなんだよこれもう…」

綾波宅

綾波「…あつっ…」

## 第8話

NERV本部

シンジ「終わった〜！」

ミサト「シンジ君、なんでいるの？」

シンジ「リッコさんの実験に付き合ってた。一回やるだけで2万円も」

ミサト「それ治験じゃないの!?!リッコの奴、パイロットに何かあつたらどうすんのよ!」

シンジ「リッコさんが言い逃れしたら信頼のない酒樽の階級が落ちるな」ニヤ

ミサト「ぬあんですってえ!?!」

…この酒樽、実を言うと車の中でクツソ酒臭いんだよな。なんだろ…病院ですか? つてくらい臭う。あれが純白としたら車中は暗黒だな。全く、酒樽もいい所だ。あれで全然酔っ払ってないんだし。てかあれから猿も出てこねーし。

シンジ「どーしたもんなー！」

NERV食堂へいやあああああああああ

シンジ「!?!」

!!!!!!!

ミサト「何事!?」ダッ

NERV食堂

マヤ「い、いや…む、無理よ、そんなの食べるなんて…!」

綾波「そう?セカンドインパクト前は食べていたの?」

マヤ「生理的に無理なのお!」

綾波「…わからない。一体どうすれば良いのか…」

シンジ「げー!!!か、カエル!」

ミサト「カエルウ!?そんなので驚いてたってわえ!」

マヤ「た、ただのカエルじゃないんですよお!!」

ミサト「へ?」

シンジ「カ、カエルの揚げ物…」

ミサト「いいいいいいいいいい!!?!?!?!」

この女…浮世離れというにも程があぬ。女は…とかいう気はないが、何を食ってたらカエルを揚げようなんて思うんだ。思わねえだろ、普通…ん?セカンドインパクト前は?おい、嘘だろ。嘘だよな酒樽、カエルの揚げ物今まで食ってきたやつに入れたとかな  
いよな??

ミサト「た、確かにセカンドインパクト前は…中国で食べられてたケド、揚げ物では

ないのよレイ……」

シンジ「あ、あー！なんだ。良かった……」

マヤ「しかも、血抜きも何もせずに丸揚げですよ!?丸揚げえ！」

シンジ「…机の上にあるのって」

綾波「全部食材よ」

シンジ「贖罪ですか」

マヤ「それどころじゃないわよ……レイがバンバン無機物入れていくから……そのCD

プレイヤーも……WALKMANも……！」

綾波「食べれるかどうか、わからなかったもの」

シンジ「ていうかなんでお前今更料理を……」

綾波「…碇君に、恩返しがしたくて」

シンジ「すまん、流星に原始レベルからの恩返しは受け付けん」

綾波「原始レベル？」

ミサト「…おっほん！つまり、レイはお礼をしたかったってわけね！それじゃ、私に任せなさい！」

あかん。これじゃ全てが闇鍋になる。自炊ができる大人を脳内で高速で探すんだ。自炊ができて、他人に説明できる脳を持つ人間。父さんは無理……ん、副司令なら……いや、



だめだ将棋指してる姿しか思い浮かばない。クソ、どーすりやあ闇鍋回避できる…!?

マヤ「あ、あのう…」

シンジ「ああ!!」

綾波「？」

マヤ「な、なに…?」

シンジ「少なくとも酒樽よりマシな奴いた！目の前に!!」

ミサト「さ、酒樽…っ！」

マヤ「へ?もしかして、わ、私…?」

シンジ「イエス！」

マヤ「ええええええええええ!!?!?!」

シンジ「綾波！食材は捕まえてくるんじやなくて店で買ってきてくれ」

綾波「ありがとう。感謝の言葉。ちなみに、レシピ本はあるのだけれど」

シンジ「それ使えや」

翌日 学校

綾波「おはよう」

シンジ「!？」

トウジ「あ、あの綾波が…」

ケンスケ「驚いた…！」

シンジ「…2人とも」

トウジ「なんや？」

ケンスケ「なんだ？」

シンジ「…腹痛いから遅れたらトイレ行ってるって伝えといて…」

トウジ「なんや、便所か。任せとき！」

シンジ「ま、任せたあ…！」

ケンスケ「…あれ絶対寸前だったよな」

トウジ「触れてやんな」

トイレ

シンジ「…今日は朝から猿が休み、綾波が朝挨拶をし…今日は本当に天変地異が起きるのか!」

不味い、不味いぞ。猿はほぼ鬱状態だ。ずっと「なんで」「どうして」を繰り返して出て来てくれて言ったなら「1人にして」って3秒間を開けて言ってくるし!どうするよこれ!俺が悪いの。俺が悪いの!?

シンジ「お、俺は…悪くない。俺は流石に…いやでもこういう変化は不幸の前兆だつてばっちゃん空手の師範が言ってた…!!」

モブー「何言つてんだこいつ…妄言か？」

シンジ「どうするよ…これえ…！」

その頃アスカは

アスカ「…私は猿…猿以下なんだ…お母さんだつて、きつと私に愛想尽かして…ウツ」

オボロエ

壁を挟んでミサト

ミサト「…こりやちよつちつてレベルじゃないわね…どうしたもんかしら…」

戻つてシンジ 教室

シンジ「戻つた」

トウジ「おー、速いな」

ケンスケ「しっかし、今日は変な日だよなあ。式波が休んで、綾波が挨拶をする！つ

て、まあ、普通の変化つて言つたらそうだけど」

シンジ「…ばつかお前…綾波が今まで口開いたとこ見たことあんのか…!？」

ケンスケ「…授業で当てられた時しか」

トウジ「せやなあ。そんなとこ見る機会もあらへんし」

シンジ「…今日、絶対天変地異が起きるぞ…!!」

どれくらいつて言うと、電車の中、トイレが見当たらぬ時、エレベーターがクツソ遅

い時に便意が出る並に絶望するくらいの変地異がな…まあ、今日はあの猿の為に電話とって熱だつて言つて休ませてあるけど…カウンセリング通わせろよ酒樽う…!!

トウジ「そないなことあるわけないやろ！」

ケンスケ「…いや、あり得るよ。例えば、エヴァが出てくる事態とか」

シンジ「それは不味いな…」

その頃NERV本部では

マヤ「ブツ…ブツブツ…」

リツコ「あら、マヤじゃない。どうしたの？」

マヤ「先輩、知ってます？コオロギって美味しいんですよ。ハハ、ハハハ…」

リツコ「…カウンセリング行くべきかしら…」

マヤ「アハ、アハハ…」

リツコ「カエル」

マヤ「ひいっ!!」

リツコ「レイね。あの子つたら全く…」

マヤ「ま、丸揚げはダメエ！」

リツコ「待つて丸揚げつてどう言うこと？」

加持「血抜きもせずに揚げることだろ」

リツコ「リヨウちゃん!? え!?! …出来事が多すぎて処理しきれないわ…」  
加持「それくらいがちょうど良いのさ」

リツコ「リヨウちゃんはミサトが丁度いいんじゃないのかしら?」

加持「敵わんな…」

## 第9話

NERV本部

ミサト「…エヴァ3号機ねえ…」

リツコ「人選は貴方に一任されてるから…間違えたら一発でクビね」

ミサト「何よお…私が信用ないみたいじゃないの」

リツコ「今の貴女より変わりつつあるレイの方が信用できるわ」

ミサト「…レイねえ」

リツコ「それに、エヴァ3号機の到着日も最悪と言って差し支えのない日だもの」

ミサト「碓司令とシンジ君の食事会…」

アスカ「ミサト」

ミサト「ういつくりしたあ！」

アスカ「…私の2号機、封印されたから…私が3号機に乗る」

ミサト「本当!?!」

学校

シンジ「…今日も猿は休みか」

トウジ「シンジがなんかいらんこと言うたんちやうか？」

ケンスケ「やめなよトウジ……」

シンジ「一応弁当は持たせてるからな。飯も食わせてる。その度愚痴も言つてない。何故だ……」

鬱つぽいのになつた原因が見当たらん。あれか。スランプと言うやつか？でも前テレビで『責任感の強い人が鬱になりやすい』とか言つてたな……あの猿、自己肯定感が高かつたからやはり鬱か？頼むから拒食症とかにはなるなよ。俺の負担増えそうだからケンスケ「聞くとお前、今日綾波に呼ばれてんだろ？」

トウジ「羨ましいの〜！」

シンジ「……それにあの猿も呼ばれてんだよ。どうしたもんかな〜」

綾波「2号機パイロットは参加しないことになつたわ」

トウジ「心臓に悪いやつちやな……」

ケンスケ「ちよ、ちよつと待つて？それつて一体……」

綾波「詳しいことはわからない。けど、さつき携帯に……」

シンジ「エヴァ関連か。あいつも面倒な選択肢を」

そう言つて帰宅する前に屋上に行つていつも通り不貞腐れてたんだが（何故かケンスケにブチギレられた為）、そこで空から女が降つてきた。ふざけんな、こつちはラピユタ

じゃねーんだぞって事でとか言おうとしたのにどっか消えて行った。

帰り道

シンジ「…アスカが休んでる理由がエヴァ絡みで、それがまつしろ…って場所で…んでそこで爆発って…」

エージエント「そう言うことだ。NERV本部へ行くぞ」

綾波宅

綾波「…」

エージエント「…これどうやって連れて行けば良いんだ…？」

NERV本部

ゲンドウ「総員、第一種戦闘配置」

冬月「ほかと関わらせる前に終わらせる…しかし妙だな…」

ゲンドウ「エヴァ初号機を出撃させる。零号機は待機だ」

地上

シンジ「…起動実験の場所で爆発ってことは酒樽とかリッコさんとか無事なんですか？」

日向『大丈夫だ。NERVの人間が全力で探している』

シンジ「指揮も親父だし」



日向『信用できない…か』

シンジ「イカれグラサンだからなあ」

ゲンドウ『聞こえているぞ、シンジ』

シンジ「…あ、なんか来た」

日向『あれは…え、エヴァだ！』

マヤ『エントリープラグの場所に粘着物らしきものがあります！』

シンジ「…ありや猿が乗ってるんじゃないか…？」

3号機「ぎいああ！」ビョーングルンツ

シンジ「空からやれば勝てると思うなよ山猿！」ガシツ

日向『そいつは侵食型の使徒だ！あまり触らない方が』

シンジ「猿程度の身体能力で調子に乗るんじゃないやねー！」ブンツ

3号機「グギヤア!？」ゴガアツ

冬月『投げたか…やはりユイ君の子供だな』

シンジ「喰らえヤクザキツク！」ゲシイッ

3号機「ぎあ！」ガシツ

シンジ「そこからATフィールド展開！」バーンツ

マヤ『無茶苦茶な戦い…』

シンジ 「どうだ参ったか山猿！喰らえマシンガン！」 ババババババ

3号機 「ぎあっ!」 ズキュン

シンジ 「当たんのかよ!？」

3号機 「ギギ…！」 グギユリグギユリ

シンジ 「なんで腕増えてんだよ！」 バギイッ

3号機 「!?」 ドンッ

シンジ 「ていうかお前コアどこだよ！」 ズドンッ

マヤ 『3号機の腹部を貫きました!』

ゲンドウ 『ダメープラグの出番はない、か…』

シンジ 「そーいやエントリープラグがどうの言つてたな…」

3号機 「!!」 ガシッ

シンジ 「ふがっ!？」

首掴まれた!? エントリープラグ調べたいのにこれじゃ調べられんじやないか! 乗つてた奴が鬱だったとは思えん動きだよ本当に! A Tフィールドを使って腕ごと飛ばしても生えないとは限らんし…やば、そんなこと考えてる暇ない! 頭飛ばす!!

3号機 「ぎあああ!!」 グググ

シンジ 「手刀!!」 ザンッ

3号機 「ぎあ……？」

日向 『…3号機の首が…!!』

シンジ 「なんだこのゼロハンみたいな青いの…すまん中の猿！共に死ね！」  
バ  
ギイツ

マヤ 『3号機エントリープラグ、潰れました…』

青葉 『なんだって!?!じゃあ、アスカは…』

ゲンドウ 『…ダミープラグを作動しろ』

マヤ 『そんな!?!』

ゲンドウ 『今のパイロットでは見当違いな攻撃をするかもしれん。やれ』

マヤ 『…はい』

シンジ 「ふんっ！ふんっ！…ん!?!充電切れか!?!電源プラグは刺さってたはず…」  
ウイイイン

初号機 「グオ…」

3号機 「ぎいあ！」バギイツ

シンジ 「なんじゃこりや!?!前見えねえじゃねえか!?!」

初号機 「グオア！」ブンツ

3号機 「ぎあっ!?!」

冬月『不良の喧嘩だな…』

そこから特に俺からは見えなかったんだが、使徒はプラグがうなじ部分にある限り3号機を操っていた…という結論が出たし、頭も腕も再生していたとか。じゃーどうやって使徒殲滅したんですかー？と聞いたらプラグ噛み砕いたらしい。抜いたら良くね？

ミサト宅

ミサト「…」

綾波「こんにちは」

シンジ「オイオイオイオイ」

綾波「派手にやってくれたわね」

シンジ「すまん、そういうことじゃないのよ」

綾波「？」

シンジ「ああ、そうだ。お呼ばれた時に…親父に渡そうとしてたタオル。俺からは渡すの気まずいっつーか…なんつーかだから渡しといて」

綾波「ダメ。それでは碓くんと碓司令が仲良くなれない」

シンジ「…んー」

綾波「後、2号機パイロットから、碓くんに」

シンジ「あの猿からか…で何これ？」

綾波「2号機の人言うには：『アンタみたいな奴へのプレゼントなんてハンカチで充分よ!』だって」

シンジ「：猿じゃねーな。山猿だなこりや」

綾波「山猿なんて猿はいないわ」

シンジ「は？いるだろ、ヤマザルとか、そう言う感じで：」

綾波「いいえ、いないわ」

## 第10話

学校

シンジ「屋上で出会った胸のデカイ女のこと、が妙に記憶に残ってる」

ケンスケ「…ラツキースケベが」チツ

トウジ「羨ましいやっちやの〜！」

綾波「ラツキースケベって、何」

ケンスケ「その登場の仕方はやめてくれよ綾波…ビビる」

綾波「そう。怖かった？」

トウジ「あー、いや、びっくりするんや。後、ラツキースケベっちゅーのはな」

ケンスケ「トウジ、やめとけ」

ヒカリ「4人共…なんの話をしてるの？胸のデカイ女とか、ラツキースケベとかって聞こえたけど」

トウジ「わわ、委員長!？」

シンジ「な、なんでもない！な、綾波！」

綾波「？ラツキースケ」

ケンスケ「ああ、綾波は知らなくてもいいことなんだ！」

綾波「…そう」

トウジ「ほっ…」

ヒカリ「?何でもいいけど、何か変なこと言わないでよ?」

ケンスケ「分かかってまゝす」

シンジ「理解〜」

トウジ「せやなく」

危機は去った。いや、危機はまだある。綾波という、N2爆雷を我々は抱えたのだ。この後綾波なら少し間を作って「…それで、ラッキースケベって、何」とでも言うだろう!その前に話題を遮って最近流行りの映画の話でもすりや終わりだ!…スタンドバイミーとか!

綾波「…そう。私だけ、仲間はずれなのね」

シンジ「!?!」

ケンスケ「な、仲間はずれって…」

トウジ「ご、誤解や誤解!」

シンジ「映画の話さ!ほら、セカンドインパクト前に少し流行った映画の、スタンド

バイミー!」

綾波「…でも、ラツキースケベって」

シンジ「!？」

ケンスケ「き、聞き間違いさ！」

綾波「スタンドバイミーとラツキースケベを？」

トウジ「と、とにかくや！シンジの第一印象から、そう聞き取ったかもしれない！」

綾波「…碓くんの…」

シンジ「トウジ!？」

トウジ「しゃ、しゃーないやろ！委員長に目をつけられたら最後やぞ!？」ヒソヒソ

ケンスケ「何はともあれ、聞き間違いってことさ」

綾波「…そう。納得できた」

…トウジの奴、僕のこと売りやがった…いや、綾波が変な知識付けて親父が動揺してその原因を潰しかねないからそういう意味では安心か…何とも複雑な。と言うか、綾波のがプロトタイプ、僕のが型落ち…そんであの猿が最新型。時系列的におかしいだろ

シンジ「とりあえず、綾波にはこの弁当」

綾波「ありがとう」

トウジ「ワイの分は!？」

ケンスケ「僕の分も…」



シンジ「期待するな。あるぞ」

トウジ「さすがは料理のセンスいや！」

ケンスケ「食ったら返すからさ！」

シンジ「…洗い物くらいやらんかつ」

綾波「私は、いつもNERVの自動設備で終わらせてるわ」

シンジ「お前のポロアパートどう見ても電気通つてねえだろ」

綾波「私が発電してるわ」

シンジ「嘘つきは万病の元だぞ」

綾波「!？」

いや、わかりやすつ。すまん綾波、嘘なんだ。とてもそうは言えないくらい動揺してらっしゃる。あれ、もしかして今までの会話の中にすんごい嘘ついてたの？あのグラサン拗らせ親父になんか嘘ついたの？…いや、それはないな。

綾波「…私の出番がサポート役くらいしか無いわ」

シンジ「ねえ今それ言うことかな綾波さん？」

これは多分、逃げちゃダメだタイプの綾波だな。うん。ちよつとトウジ達？何グラウンド見てんの？全員が全員わたしから目を背けております。クソが

綾波「ごめんなさい。碓司令に『シンジの精神を徹底的に潰せ』（声真似）と言われて

いたから」

シンジ 「それはそれで別に親父だなあって感じるけど…声真似全く似てないよ綾波」

綾波 「そう…NERVの人たちには好評だったのに」

シンジ 「そうだったか」

綾波 「冬月副司令は笑いを堪えていたわ」

シンジ 「あの人笑うの？」

綾波 「隅でプルプル震えていたもの」

ふ、冬月副司令…今まで心の中で親父専属の執事とか思ってたんですけど…人間味がありません…人間味がありません…脳の回転なら少しはウチの親父超えてそうな顔してるのに、ポーカーフェイスじゃないのか。いやそこはちよつと親父以上のポーカーフェイスであつてほしかったな。

シンジ 「…今日はちよつと疲れたかな…」

綾波 「疲れたのなら、帰って即黙ってお風呂に入って食べて寝る。が良いわ」

シンジ 「男は黙ってカレーメシ！」

綾波 「碓君、滑ってる」

シンジ 「わーつてら」

屋上

シンジ「だーるーいー」

加持「どうしたんだいシンジ君」

シンジ「ちよっそれはビビるって」

加持「ひどいなシンジ君は。ま、ブルーな気分には水を刺されるのは嫌か？」

シンジ「…嫌というより元からブルーじゃないですよ」

加持「ん？葛城言いつたのと…確か、『シンジ君ったら、アスカがもういないこと忘れてお弁当箱ひとつ数間違えて作るのよく？』とかだったんだが…」

シンジ「逆に聞きますけど、パーを出すのが癖になつてる人に対して急にジャンケンでパーを出すの禁止にしたら対応できると思います？」

加持「まー、無理だな。しっかしその性格は変わらないなあ」

シンジ「同居人が酒を樽に入れる量くらい飲みますからね」

加持「葛城かあ…」

ちなみにアルコールをあれだけ飲んでおいて作戦部長と言う座から降りないの、何気にすごいな。アルコールって確か保健で習ったけど脳みそを小さくしちゃうんでしょ？あれだけ飲んでもアルコール5%だから大丈夫理論なのかな…

加持「言っておくがなシンジ君」

シンジ「え？」

加持「葛城に常識を突っ込むなよ。常人離れつてレベルじゃないからな、あいつは」  
シンジ「そんなのあり得るんですか？」

加持「あり得る！あいつ自身運がいいからそれなりの身体を引き当てたのさ」

シンジ「じゃ、僕は当たりに見せかけたハズレですね」

加持「5年で空手をマスターして使徒に対する有効打とする、その点に関して言えば君の体は恵まれてる」

綾波「∴葛城作戦部長の彼氏」

加持「あーやっぱり!?そう見える!？」

シンジ「∴ずっと現れた奴にさっきの会話全て持っていかれた気がしたよ∴」

加持「しっかし何気に、ファーストチルドレンを見るのは初じゃないのか!？」

シンジ「何言ってるんだ加持さん∴」

加持「あ、俺をあだ名で呼ぶときはスイカ畑って呼んでくれ!」

シンジ「いやなんで?？」

## 第11話

NERV本部

ゲンドウ「第十の使徒か……」

冬月「まさに最悪のタイミング、と言ったところか？」

ゲンドウ「いや、構わん。ダミーシステムさえあればシンジは要らんだ」

冬月「残酷な男だな。ユイ君の遺したものだと言うのに」

地上

シンジ「……え!?使徒!?えっちよっ、今買い物してて……うえっ!!道路が崩れてる!?!」

ミサト『そこをなんとか!へりで迎えに行くから!!』

シンジ「信じられるか酒樽!!」

酒樽の言うことなんか誰が信用できるか!えーと、考えろ!考えろシンジ!今零号機は修理中らしい、んで二号機は封印中!初号機が動ける!そんなパイロットは綾波!式波は死んだ!!だから……えーと……今出れるのが初号機と綾波ってこと?

ミサト『シンジ君!とりあえず今二号機が出たから!』

シンジ「2号機い!?そんなパイロットは……!て言うか、早くへりを!第三スーパ一前

ですから!」

ミサト『パイロットはわからないわ。今、第三スーパー前ね。了解!』ブツツ  
シンジ「信じらんねえ! ブツ切りしやがった!」

加持「:ん? シンジ君!」

シンジ「うわっ髭虫!」

加持「髭:って、そんなことより使徒が出たんだろ!? どうしてここに!」

シンジ「とりあえず今はへりを待ってます」

2号機「:」

シンジ「マジで2号機だ:」

加持「馬鹿な、2号機は完全に:まさかマリが:」

シンジ「なんだって? マリ?」

こんな緊急時にまた女でも捕まえたのか!?:いや、そんなことより!どして2号機が  
:俺が3号機やった時のアレか?:無人で動かせるのか:いや、それなら初号機が既に  
出てるはず。あ、へり来た。着いてから考えるか:

NERV本部

ゲンドウ「何故だ:何故拒む:ユイ:」

冬月「おい、碇。たった今第三の少年をへりに乗せたらしいが」

ゲンドウ「…クソツ」

シンジ「来たぜ！」

冬月「早すぎないか第三の少年!？」

ゲンドウ「エヴァを調整しろ。ダミーシステムは不要だ」

地上

マリ（空から飛んで来た女の人）「ぎーて…やらせてもらおうか…ニヤ！」ゲシツ

第十の使徒「…」バアアアアン：

マリ「ATフィールド…でも！」ガシツ

第十の使徒「？」

マリ「えいえい！」パリンパリン

第十の使徒「…」

マリ「おこつ」ドオオオオオオン

第十の使徒「…」

マリ「何よつ…少しは乗ってくれたってえ!？」ジャンプッ

NERV本部

青葉「2号機…随分と戦い慣れてますね」

ミサト「1人でやりたいと言うのは分かったけれど…無謀ね」

綾波「…」

ミサト「ちよつと何でレイまで出てるわけ!？」

青葉「ん!? システムではまだ整備中に…」

ミサト「…貴方それ初号機と間違えてるんじゃない」

青葉「本当だ!？」

…さて、皆さんが僕を忘れているであろう内に僕も出撃しますか。整備中? ダミーシステム? 知るか。俺は出るんだよ!! (脳筋) と思ったが綾波のやつ、変な爆弾を持っている。しかも2個。一個は床に置いて、一個は手に持って。野球かな?

綾波『…葛城作戦部長、N2爆撃を行います』

ミサト「?!?!」

マリ『ちよいちよい! 今なんか変な会話聞こえたけど!?!』

ミサト「零号機は修理中よ!?! 2号機に前衛を任せて! レイは後ろから射撃! 良い!?!」

綾波『…わかりました』

マリ『それじゃあつてうお!?! …私も前衛を任された身! しつかりとやりますか! 秘密コマンド発動!!』

リツコ「!?!」

マヤ「秘密コマンド!?! そんなのあるんですか先輩!?!」



リツコ「いいえ…そんなのではないはず…!」

マヤ「でも、先輩! 2号機のリミッターが解除されて行きます!」

リツコ「なんですって!?!」

マリ『んにやにやにや…!』バギバギバギツ

シンジ「肩凝りのキツイ酒樽だな」

ミサト「…レイはサポートに徹して! 良い!」

綾波『了解』バババババ

第十の使徒『!』スパアーンツ

マヤ「!?!」

マリ『あつぶな…!』

リツコ「攻撃手段はATフィールドだけではないのね…」

綾波『ふんっ!』ブンツ

第十の使徒『?』ドーンドーン

ミサト「レイ!?!それは爆弾よ!?!」

リツコ「いえ、このまま…」

マリ『でえい!』バリバリインツ!!

日向「ATフィールドを破いた!」

ミサト「これでどうか…」

…さつきから綾波氏がすごい攻撃の仕方してるの、何だろう。なんかやべー時って一周回って冷静になるんだな。さて、さつき格納庫行ったら門前払いだったんだけど。つってもあと少しで取れるらしいからすぐに出撃できると思うけどね！

第十の使徒『！』スパアンツ

綾波『!?!』

ミサト「零号機を!?!」

マリ『まだこつちがあるにやあああああ!!!』ガブツ  
青葉「だめだ、ATフィールドで剥がされる！」

第十の使徒『!?!』スパアンツバアアアアン

ミサト「追い討ちね…」

リツコ「…シンジ君、出れるそうよ」

シンジ「ようやくだ！」

マリ『んにやあ!?!』ドンツ

綾波『2号機の人、離れて!』ガシツ

ミサト「レイ!?!それはダメよ!レイ!!」

マリ『んにやあ!?!本気だったの!?!ちよ、ちよい待ちく!?!』ダツ

レイ『…っ！』カント

ミサト「蹴るの!？」

青葉「一応片腕は残ってるんですけど…って、二発目が本命ですよレイの奴!!」

ミサト「はあ!？」

…その時、僕は格納庫に向かって走っていた。走ってる途中に衝撃が走った。こけた。痛い。クソツ綾波め…地上に出て使徒ぶつ倒したら文句言つてやる…的なこと考えて格納庫についてさあエヴァに乗るぞって時にまた来た。今度は足首挫いた。綾波お前ほんと許さんからな絶対

地上

シンジ「あゝやゝなく…!？」

第十の使徒（綾波複合体）「〜♪」

ミサト『シンジ君…悪いお知らせがあるわ。2号機と零号機が完敗したわ』

シンジ「それだけですかね。俺の知ってる使徒とは全然違うんですけど？」

ミサト『…零号機が…食べられた!』

シンジ「エヴァ食うのかよ…こりや完全にあの世行きだろコレ!」バンツ

第十の使徒「…きいああああ!!」バアアアアアン!

シンジ「2号機とは違うつてところを見せてやるぜよ!」バギインツ

第十の使徒「ぐぎいあああ!!」スパンツ

リツコ『さつきまでの本気じゃなかったの!』

シンジ「横に飛び出すぜ俺はよ!」スパアンツ

第十の使徒「♪」

シンジ「こんなことがあつて良いのかよ…片腕持つてかれた…!!」

こちらら錬金術も義肢もねえんだぞ…ATフィールドは完全に強度で負けてる…ならば頭脳だな。やはり頭脳が一番なのさ。脳筋だなんて今の時代全く合わないぜ。だがしかし、やはりコテンパンにしないと気が済まない。力で一発殴らせてもらうぜ

シンジ「俺の眼前に現れたことを後悔するんだな!」ブンツ

第十の使徒「!」バギンツ

シンジ「やりい!入ったぜ!調子に乗ってる奴に限ってどしてこうも無警戒なのかね  
〜?」

第十の使徒「…!」バアアアアアン

シンジ「ふおったあ!」ゴロンゴロンツ

マヤ『初号機活動限界まで後1分!』

ミサト『やはり充電が完璧じゃなかったか…!』

シンジ「…こうなりや賭けだ!ATフィールド押し出してやる!」バアアアア…

リツコ『ATフィールドを一箇所……!』

シンジ「……ふんっ!」シュドンッ

第十の使徒「!?」バリバリバリバリイッ!!

マヤ「……初号機、活動限界です……」

シンジ「っ畜生!髭ジジイ!どうしてこうも邪魔してくんだよ!?!」

不味い!不味い!何かわからんが人生はゲームじゃねえんだ!やり直しは効かんぞ!  
!どうすりゃあ良いんだどうすりゃ!これだから充電式は嫌いなんだよ据え置き機  
じゃダメなのかよ!!……いや、マジで動いてくれよ!コンテニューできねえんだよ!

シンジ「動けっつてんだクソが!」ドンッ

第十の使徒「くっ♪」

リツコ「今度こそトドメを刺すつもりね……!」

マヤ「初号機……動きます!」

シンジ(覚醒)「やっぱり動かなくなったら叩くのが定石なんだよ!もう俺はキレたぞ  
!その色っぽい体外せまず!」

第十の使徒「!?……!?!」

シンジ「死ねオラア!」ジユドオンッ!

第十の使徒「ギィアアアッ!?!」ドンッ



使徒の体内(?)

シンジ「うおっどこだここ!?!…って綾波いんじやねーか!」

なんでここにいるんだ!?!なんであいつ裸なんだ!?!…いや、それはどうでも良い!兎に角あいつを取り出してあのキモいバランスの体を素の体型にしねえと!なんか境目みたいなのあるな…いやこれ境目だ!でもここより奥に行かねえと…!

綾波「…ダメ。私は、ここでしか生きられない」

シンジ「それは使徒の中って意味か!?!それならATフィールド張れてデカくて超破壊力持てちゃった初号機は使徒と同じだろ!?!」

綾波「…そうなの?」フワツ

シンジ「まず手を出せ…!俺自身あんまここにいたくねえんだからさ!」ウデノバ

シー

綾波「…ありがとう、碓君」グッ

シンジ「力抜くなよ!マジで!」グイッ

地上

リツコ「使徒のコアが…レイに…!?!」

加持「…初号機を使ったサードインパクト…ゼーレが黙ってちゃいませんよ、これは

…」

リツコ「サードインパクト!」

使徒の体内

シンジ「とりあえずお前出したから…初号機の中にでも入っとけ!」

綾波「…分かったわ」 ススツ

シンジ「さて…あとは使徒を…そーい、いや使徒ってどこ行った?」

地上

ミサト「シンジ君…ありがとう」

加持「釣れないな、彼氏がいるのに他の男の名前を出すなんて」

日向「!」

加持「それじゃ、俺はこれ止めてくるわ!」

リツコ「リョウちゃん!」

ミサト「加持!」

NERV本部

ゲンドウ「…もはや、裏死海文書でさえ不要だ」

冬月「自分達の歩む道は、自分で見つけなければな。後処理はゼーレの少年か?」

ゲンドウ「無論だ。奴もいずれは消すのだからな」

地上



??? 「お疲れ様、お休みなさい」ブンッ

加持 「ちよっ」

初号機 「」グサッ

リツコ 「サードインパクトが収まった…!？」

マヤ 「初号機、活動停止です。が…」

リツコ 「が？」

マヤ 「最後、使徒のコアをレイにして取り出した時…活動時間が、無限に…」

ミスルト 「何ですって…」

??? 「今度こそ、君を幸せにしてみせるよ。シンジ君」

## 第12話

ヴンダー内部（最初のシーンはすつ飛ばす）

シンジ「…」

鈴原サクラ「自分の名前がわかりますかー？これが誰だかわかりますかー？」

シンジ「シンジですねー」

サクラ「記憶に障害はない…つと」カキカキ

シンジ「…はあ…すう…！」

サクラ「何か余計なことせんでくださいよ!？」

シンジ「どこですかここおおおお!?!？」

サクラ「…いや、まあ、そうなんですけど!」

「なんやこの女…何が『いや、まあ、そうなんですけど!』だ。場所の問いに肯定で答えるのか?と言うより、今気が付いたんだけど俺が何かしようとしたら毎回銃向けられてるっていうかずーっと向けられてないこれ?…これ、ダメな奴じゃない?」

シンジ「…諦めて寝よ」

ヴァンダー指揮系統の場所

シンジ「はっ」

サクラ「起きましたか?」

シンジ「…どこですか、ここ…」

サクラ「えーつと…葛城艦長、連れてきましたよ」

シンジ「…葛城…えーつと…酒樽…」

ミサト「サクラ少尉」

サクラ「え?は、はい!」

ミサト「随分と記憶が曖昧のように見えるが?」

サクラ「ええ!?!ちよ、覚えてますよね!?!」

シンジ「えーと…酒樽が…艦長…?!」

サクラ「…これ、純粹に混乱してるだけじゃないですか」

と、まあそんなことになった訳だが。なんだか全員変わったなく。小学校の時に一緒だったケンタつて奴と久しぶりに会いたくなってきたなく!…いや、待てよ。酒樽が艦長?! NERVは使徒を全部倒して海へと足を進めたのか?

シンジ「艦長つてどう言うことですか?と言うよりイマココどこでいつの時代なんですか?」

ミサト「シンジ君」

シンジ「どーもシンジ君ですよー」

ミサト「今全ての疑問に答える暇はないの。ただ、貴方はもう、何もしないで」

シンジ「：アンタからしたらそれは全て分かっているだろうけどさ。こっちはなんも分かっているのよ：」

日向「。パターン青！NERVです！」

リツコ「生き物の成り損ない：厄介ね」

ミサト「良いわよ：神殺しの力、ここで試させてもらおうわ！」

リツコ「!？」

ミサト「重力制御システムを起動！」

スミレ・ナガラ（操縦の人）「ですが、まだやったことも：」

ミサト「ぶっつけ本番で行くわよ！アスカ、制御システムの件お願いできる!？」

シンジ「あの猿生きてんの!？」

サクラ「さ、猿って：」

と、それから色々とおあって事情聴取に遭っている。なぜ、と言う気持ち拭えないのは事実ではあるが、なによりもこの事実を受け止めるために必要だろうと判断したから。本当の理由は特にやるのがなかったからだだがそこは黙っておこう

シンジ「…で、どーなってんすか、ここ」

サクラ「し、シンジさん…信じられないかもしれないかもしれませんが、貴方の知ってる世界の…14年後なんですよ、ここ…」

ミサト「サクラ少尉、あまり喋りすぎないで」

シンジ「…14年後…じゃあさけ…ミサトさん。エヴァって言うてください。ほら、エヴァアって」

ミサト「エバー」

シンジ「んふっ」

ミサト「…」

リツコ「コンピューターの計算の結果、シンジ君。貴方がもし仮にエヴァ初号機に乗ってもシンク率は0.00000%よ」

シンジ「…でも、こっちは3人で奇跡起こしたことがありますしねえ」

リツコ「ええ。だからこそその首輪よ」

シンジ「これあれですよね、多分。やらかしたら首チョンパの」

リツコ「…そうね。我々としては貴方を敵に渡したくはないの」

シンジ「まるで敵が人かのような言い方をしますね」

ミサト「人よ。相手はNERV本部司令、碓ゲンドウ」

シンジ「相変わらず変な親父だなあの人……」

リツコ「しかし、アスカが初号機を奪還する際に覚醒し、使徒を倒した。この奇跡はなるべく起こしたくないと言うのが我々の思いよ」

シンジ「なーんだかなー……求められるからエヴァに乗ってた気がすんだけど……」

とか言つて不貞腐れてると、変な奴が来た。いや、変なやつというよりも、簡単に言うなら、すごい見覚えのある女、だろうか。使徒がへばりついて取れなかったプラグを潰して、完全に死んだと思っていた……あの式波・アスカ・ラングレー……階級は忘れたなあ

アスカ「ふんっ！」バンツ

シンジ「猿が来た！」

リツコ「あと、貴方の管理・保護の人材として、隣にいる人を採用しているわ。少尉、自己紹介を」

サクラ「あ、はい！碓さんの担当となりました！鈴原サクラと申します！」

シンジ「鈴原……思わぬ出会いばかりで少し頭痛がしてきた……」

サクラ「以前は、兄とよく遊んでいたそうで！」

シンジ「……そんなことより押さえつけられてフーフー言ってるこの猿は……」

アスカ「フー……！フー……！」

ミサト「…っ！」グググ

アスカ「退きなさいミサト！」バンッ

ミサト「!?」ドンッ

リッコ「…いくらなんでも艦長がこれではね」

ミサト「…」ウルウル

アスカ「こんの、バカシンジが！」バギイツ

シンジ「…お前が俺と同じくエヴァの中に数年閉じ込められてた、なんてことがない限りは精神年齢はそちらのほうが上なはずだが…? 14年…すんごい早い更年期障害だな？」

アスカ「このデリカシーのカケラのない…ガキシンジが！」

ミサト「あ、アスカ! やめなさい! 今はちよつとやめなさい!」

アスカ「うるさい!」バシンッ

ミサト「…」ドンッ

リッコ「…」

なんかさつきも同じ光景見たぞおい。お前酒足りてねえんだろ。というより、本当になんでお前生きてんだよ。そう思ってるうちに、2回目の拳が迫っていた。丁度手錠はなかつたので、こつちから割ってやった。そしたら驚いてそのままこつち側に来た。は

?

アスカ 「んなあ!？」

シンジ 「テメーのせいで使徒一体面倒なことになったんだ覚悟しろ！」 ゲシイッ

アスカ 「んぎいあああああああ!!!?」

シンジ 「…赤木博士でしたっけ」 ヨイ!!!ヨ

リツコ 「ええ…」

シンジ 「これお返しします」

リツコ 「そ、そう…」

ミサト 「…」 グスッ

サクラ 「…か、艦長…? 大丈夫ですか?」

シンジ 「一応馬鹿みたいな運動神経してるアスカの張り手なんだから無事な方がおかしいと思うんですがあっ!？」 ゴオオン…

ミサト 「!?…」 ゴシゴシ

リツコ 「アスカ、起きて！ 敵襲よ！」

シンジ 「また来てんのかよ!!」



## 第13話

ヴンダー

シンジ「…揺れますなあ」

サクラ「ここまで激しいとなると…ってうわあっ!？」

シンジ「…おいおい…確か零号機はN2使って自滅したあと食われたんだろ…いや、そもそもあの猿と式号機がある時点で何も言えんか…」

サクラ「どど、どーしましよ!？」

そんなこんなであらあららと困っているうちに声が聞こえた。なんか、綾波にすごく似た声だった。ただ、最初に『あー、あー、マイクテスト、マイクテスト』なんて言った瞬間、こいつ綾波じゃねーなと感じたのは、綾波がマイクテストやらねえだろという先入観のせいかな。

綾波? 「碓君、来て」

シンジ「ちよ、サクラ少尉さん!？」

サクラ「あ、はい!?!なんでしょう!？」

シンジ 「銃とかないの!?!ここに来る過程で銃構えた奴いたよね!?!」

サクラ 「うえ!?!じ、銃!?!え、えー…あつた!」バンツ

シンジ 「ヒイツ!?!」

サクラ 「落ち着いて…標準を合わせて…!」

シンジ 「こいつガチじゃん…」

綾波? 「碓君、早く」

シンジ 「いや早くって言ったってどこにどうするんだって話」

綾波? 「わからないなら、私が連れてく」ガシツ

シンジ 「!?!」

サクラ 「シンジさん!?!」

シンジ 「ちよ、おま!ヘル、ヘルプ!!ヘルプミー!!」

サクラ 「エヴァにだけは乗らんといてくださいよ!」

シンジ 「やだー!ちよっとー!抵抗してんのー!だれかたすけてー!」

アスカ 「その首置いてけ!」ザンツ

シンジ 「うわあつと!?!ちよ、猿さん!?!」

綾波? 「任務完了」

…まるで誘拐された気分だ。いや、誘拐はされている。仕方ない。仕方ないとは言

え、エヴァが空を飛ぶなんて聞いたことがない。あのあとよくわからん桜色のエヴァもいたし、逃げたいのに首切り落とされても多分復活する(っっていうかした)ようなエヴァからどうやって逃げろと。

NERV本部

シンジ「へー、まるで遊園地に来たみたいだなー」

ゲンドウ「来たかシンジ」

シンジ「お、来たなゲンドウ。自分の父親がイタすぎる厨二病って知った時の僕の気持ちとかって想像できるかな？」

冬月「…やはり、ユイ君の子供だな」

シンジ「そしてこの目の前にある初号機によく似たパチモン…ガンダムで言うパチモンみたいなものってなに？」

ゲンドウ「が、ガンガル…シンジ、お前の目の前にあるのはエヴァ13号機。初号機をベースにした二人乗りのエヴァンゲリオンだ」

シンジ「二人乗りい？大抵、パーテイゲームの後追いで作られるゲームってのはクソが多いのと同様に、このエヴァの性能も」

ゲンドウ「安心しろ。エヴァの操縦は一人でも出来る」

シンジ「…二人乗りって言ったけど、必ず二人？」

ゲンドウ「もちろんだ」

：相変わらずなにを考えているんだ、ウチの親父。いや、なにも考えていないが正解か、ウチの親父。そろそろ僕がお仕置きに代わって月よするぞ。このエヴァ13号機とやらを使って空を落とすぞ。いや、それはまず同乗者によるが：

ゲンドウ「シンジ、お前と共にエヴァ13号機に乗るのは彼だ」

カヲル「フフツ：久しぶりだね」バアーン

シンジ「：お前じゃねーんだな」

綾波「ええ。正直言つて、羨ましいわ」

シンジ「切られても治る奴の方が良いと思うがなあ」

綾波「最新鋭機はロマン、そう教えてもらったもの」

シンジ「：これまた変なことを言う：」

カヲル「ひどいなシンジ君。出会って早々無視かい？」

シンジ「：どーせまたやべーことがあんだろ？それじゃーさっさと現実逃避が一番よ」

カヲル「そうかい：君がそれで幸せなら、それで良いんじゃないかなぎつ」バギイツ

シンジ「君がそれで幸せなら：？嫌味ったらしく言うんじゃないやねえぞオラア！」ゲ

シイツ

ゲンドウ「…勝ったな」

冬月「ああ。下顎を狙った正拳突き、そして不意を食らったゼーレの少年が体を丸めた瞬間の顔面に蹴り。碓…お前が預けた場所には随分と野蠻な武道場があったものだな」

ゲンドウ「…実を言うと私は全く知らない」

冬月「はあ…」

上二人がなんか話してたが知らん！と言う勢いで殴ってたらしいのまにか前歯へし折れてた。笑った。それに対して流石にこいつも思うところがあったのか、それとも対等な立ち位置であると示したかったのか、殴りかかってきた。しかしまあ遅い。カウンターを食らわせようとしたら腹に硬い何かを入れたのか、拳でぶん殴った結果、僕の手が大惨事に。

シンジ「ああ！てめえ！」

カヲル「これで対等な関係だろ？シンジ君。折角同じエヴァに乗るんだ、対等に、仲良くして行かないと」

シンジ「なんだと…！」

カヲル「君がこれを今までつけていたように、今度は僕がつける番だ」カチツ

シンジ「…？」

カヲル「その首輪は、元々僕を恐れたリリンが作ったものだからね」カチツ  
シンジ「すまん、なに言ってるかよくわからんが、俺はお前の名前を知らんから対  
等じゃねえ！」

カヲル「!!そ、そうだった…!最も原始的で、リリンとして大切なところを見落と  
していたよ、シンジ君…僕は渚カヲル。カヲルって呼んでくれ」

シンジ「俺は碓シンジ。あのクソ親父の息子だ」

カヲル「…容赦ないね」

さて、自己紹介が終わったところで、なにをしようか。このまま13号機の試運転と  
いってもいいし、綾波をまたいじるのも良い。しかし、その綾波はどう見ても綾波つぼ  
いであり、つぼい部分が外見と声くらいなので、さてまた悩むのだ。

シンジ「…お前って綾波なのか?」

綾波「そう。私は綾波レイ」

シンジ「…なんだかよくわからんが、綾波レイつぼくないんだが」

綾波「貴方を前にして、本物の綾波レイならばどうするの?」

シンジ「やっぱ偽物かよ。綾波はな〜?ここでこう言うんだ。『エヴァと碓君を繋ぐ  
ものは何?』ってな!」

綾波「そう、なの?」

シンジ「嘘だ」

ゲンドウ「待てシンジそれ貴重な」

冬月「またんかあ！」ゲシイッ

ゲンドウ「ごふっ!？」

冬月「なんでもないよ、第三の少年。好きにしたら良い」

シンジ「…!？」

綾波「冬月副司令は昔柔道三段、剣道5段を持っていたそうよ。空手も習っていたらしいけど、それも師範をやるほどらしいわ」

シンジ「…おかしいだろ!？」

綾波「でも、40までの話よ。40からは教授として働き始めて、今では気絶させるのにも一苦労だ、って言ってたわ」

シンジ「…あれ多分人間の域じゃねーぞ」

カヲル「イテテ：僕もここに来てから初めて彼の蹴りを見たけど、速いね…」

## 第14話

NERV本部

ゲンドウ「…完成したか」

冬月「ようやく。人が減ったせいで完成にかなりの時間が必要だったが」

ゲンドウ「構わん。その時間でシンジを使えるようになった」

冬月「…」

シンジ君の部屋

シンジ「…息を合わせる」

カヲル「そうさ。息を合わせるんだ。阿吽の呼吸、と言うものがあるだろう？」

シンジ「…他人の動きに合わせるのは得意だぞ。だが、息か…」

カヲル「そう難しくはないさ。要は、二人で一人になれば良いんだ」

シンジ「二人で一人に…どうするよ。フュージョンするか？」

カヲル「リリンにそれが出来たらエヴァはいらないさ」

シンジ「それもそうだな」

…ん？リリンに？ちよつと待て、リリンって何？英語の授業で急に進出単語出てきた



気分なんですけど？て言うか何、文脈から考察するにリリントてのは人…だと思っ  
が、14年後なので新しく言葉が出来ててもおかしくはない…か。

シンジ「…あ、チエロある？」

カヲル「チエロ…少し待っていてくれ」

綾波「…何故、私まで？」

シンジ「あの渚ってやつがホモだったらお前を置いて逃げる予定だった」

綾波「ホモ…」

シンジ「ホモ is 同性愛者」

綾波「…?」

シンジ「これがわからんかく…じゃあどうやって…」

カヲル「ちよつと待って今不名誉な言葉が聞こえたんだけど？」ガチャツ

さて、それは置いといてだ。結局、息を合わせるのなら身近にある物で、全員が一応  
はできる程度の物。というわけで楽器が選ばれたわけだが。綾波、お前なんかできるの  
？と疑問に思う。が、これまた意外。お前なんでタンバリン…？

カヲル「彼女は、僕たちのサポート役だからね」

シンジ「…はあ。」

それから数日後 ヴンダー

青葉「信号来ました。新型エヴァ、確認！」

ミサト「…」

NERV本部（多分セントラルドラマ）

カヲル「もうすぐでリリスの結界だ。これを突破するためにこの13号機は存在しているんだ」

シンジ「おい。聞いて良いか？」

カヲル「なんだい？急に口調が荒くなってる」

シンジ「…この新型、初号機のパワーの何倍出せる？」

カヲル「え」

シンジ「行くぞ13号機…これが世界の正義、秩序！パワー!!!」ゴンツ

カヲル「エヴァの拳ではリリスの結界は…!」パラパラ…

リリスの結界とやらは破れた。残念だったな。世界の理、それ即ち拳。力なのだよ。どのような不可侵条約があろうと力が有れば破れるのだ。力を有する、それがこの世の正義。冬月が初号機の中に綾波が碇ユイが、と言っていたがこれが初号機じゃなければ関係ないね。

シンジ「…つと」

カヲル「む、無茶苦茶だ…!」

シンジ「で、お前さんの目的は確かあの白い奴の背中に刺さってる槍二本だな？」

カヲル「あ、ああ…それなんだけど…」

シンジ「けど？」

カヲル「おかしい…二つとも形が同じだ…」

シンジ「ああ？知らんわ…つーことは、あの二つの槍、元は片方が違う槍だつてことお

!？」

カヲル「!？」

シンジ「チツキショー…誰だやりやがったのはあ!？」ガギーンツ

アスカ「…!!」

シンジ「なるほど式号機…！合点が行つたぜ…必要とされることばつか望んでたメンヘラ気質の猿がまだ生きてる理由が…！」

アスカ「はあ!？アンタサクラ少尉に言われたのにまだエヴァに乗ってんの!？」

シンジ「あ…やつば猿か。シャアザク並みにわかりやすい」

アスカ「褒めてんのか褒めてないのかよくわかんないわね！とにかく降りろ！」

綾波「つ！」ブンツ

アスカ「がつ!？」

シンジ「おい」ガシツ

綾波「何?」

シンジ「お前何やってんだ!」ゴオンッ

綾波「!」ゴツバァン

シンジ「…ここは俺の独占場だ。14年も寝てたんだ…寝起きの運動は過酷じゃないかな」

アスカ「寝起きの運動気分…!」

さて、漫画によく出てくるラスボス…又は強キャラ感覚を醸し出して見るが、やはり格好がつかない。せめて、こう、初号機だったら、ありがちな感じの展開だったというのに。仕方がないっちゃ仕方ないか…隣の渚が考えの結論を出すまではウォーミングアップだな。

マリ「…アダムの器ちゃんも面倒だけど…ワンコくん、君が一番だにや♪」パンツ

シンジ「タイムマンが一番だな」バァァァンッ

アスカ「!」

マリ「にや、にやに…っ!」

シンジ「…おい、綾波」

綾波「酷い…手は出さない?」

シンジ「上にいる卑怯者引き摺り下ろして来い」

アスカ「会話しながらなんて余裕ね！」ゲシッ

シンジ「甘い！」ブンッ

アスカ「グッ！…身体能力じゃ敵わないわね…！」

シンジ「使徒になった方が良かったな」

アスカ「そう！」ゴバアンッ

シンジ「髑髏で目隠し…しかし無駄である！」

アスカ「ふんっ！」ゴンッ

シンジ「ほがあっ!？」

アスカ「そつちが14年間寝てた間に、こつちは戦闘経験積んでんの！負けるわけが」

シンジ「行け、空飛ぶ物体ども！」ヒュンヒュン

アスカ「これくらい！」

マリ「あれ…：なんかこつち来てにやい？…ま、タイマンに割り込み失礼！」バンッ

シンジ「うおっ!？」

空飛ぶ物体が壊された!?!なんて奴！なんて奴って言うか、そもそもあんな飛び回るモンを撃てるか!?!上にいる狙撃手、馬鹿強い…：多分あのミョウバンみてーな形した使徒と戦ったら一発で勝てそうだぜ…：あれくらい厄介だな

アスカ「おりやあ！どおうっせい！ふんぬあ！」ゴンッバンッガンッ

シンジ「…やめろ猿。見苦しい」

アスカ「じゃあ！この！壁を！無くせ！」パンツパンツ

シンジ「そうだなー…」

カヲル「そうかつまり…ここで打つ手は…！」

シンジ「なんか出たか？」

マリ「アダムスの器さん…さらばにやっ♪」パンツ

綾波「あぶつ」スツ

マリ「私の狙いを外した!?!」

シンジ「で、どうすんだ！引っこ抜くのか!?!」

カヲル「いや、それは」

アスカ「ふんっ！」バアンツ

シンジ「喝っ!!」キュイイイイ

マリ「まさか…第十の使徒みたいにATフィールドが展開できるの!?! 姫、逃げて！」

アスカ「はあ!?!」バアアアアンツツ

マリ「あ、あちやー!…そこから抜けな、ゼーレのパイロットさん」

綾波「…それは、私？私なら、それは出来ない。命令に、ないから」

マリ「オリジナルなら特攻覚悟で好きな人に尽くすんだけどな…堅物にやっ」

綾波「オリジナル…」

シンジ「…要するに、あの槍は引っこ抜くな、ヴィレに入れてることか？」

カヲル「ああ、そう言うこと…!?シンジ君、操作が…」

シンジ「操作あ？んなモンこっちは…あれ？」カシユツカシユツ

カヲル「…そうか…ダミーシステム…!!」

シンジ「取ってつけたように単語をさらけ出していくな！」

クソツ！エヴァが動かねえ！どうなってんだ!?ダミーシステムって…おい、それじゃあ俺達いるだけじゃねえか!?例えば、ジャンケンでクラス一の美少女とクラス一のブスがジャンケンしてデザートを争ってブスが勝ち取ったとしても、結局は周りからの蔑みの目と悪口から結果的に取りにくくなってしまいうようなアレか!?形式上存在してるっただけなのか!?

シンジ「ちよ、おま！抜くな！槍を抜くな！嘘っ!?抜きやがったよこいつ！」

カヲル「クッ！」

アスカ「やりやがったわね…!!」

マリ「まずい…!!」

綾波「一体、何が…」

アスカ「こんの！」ガンツ

シンジ「痛っ！ちよっ、待てよ！ダミーシステムで動いてんのになんで痛みまで来んのさ！」

カヲル「…！使徒だ！使徒だよシンジ君！」

シンジ「嘘だろ!？」

エヴァmark6「ぐぎゅ…」

アスカ「〜！なんとしても、サードインパクトの続きが起こる前にあいつを片付ける！」

綾波「っ！」ブンツ

シンジ「総力戦…とはいかんなあ！」

マリ「無駄にや〜…全身がコアで、どうにもならないにや」

エヴァmark6「ぐぎゅぐりゅ」

綾波「…これは…私…私は…何…」

シンジ「くそッ！また！またやられたぞゲンドウに！」

カヲル「まさか第一使徒の僕が最後の使徒に墮とされるとは…！さすがはシンジ君の父親、リリンの王だ…!!」

マリ「DSSチョーカーもパターン青…ゲンドウ君の狙いはそれか！」

全部だ！全部！やりやがったなゲンドウ！この恨みは高くつくぞ！結果論で言えば、



俺はずーっとゲンドウの良いようにされてたってわけだなオイ！どうすりやあこれを突破できる…これをどうやって外す…!?

エヴァ13号機「グギア…!」

シンジ「…!?!」

リリス「あんぎや、んぎやあ…!」

エヴァ13号機「ガギツ」バクツ

アスカ「擬似進化形態を超えている!」

マリ「覚醒したから…!?!」

シンジ「急な高度上昇はGが掛かるからって…!?!なんじゃこの景色…!?!」

カヲル「…今の、世界だよ。シンジ君…」

シンジ「今の世界…!?!せめて今の俺が知ってるやらかしでこうなつて欲しいんだが

…」

カヲル「フォースインパクト。その始まりの儀式がこれさ…」ボワアン

シンジ「お、おい…アンタ、首輪…!?!」

あの首輪つて首チョンパで一撃必殺なアレだよな!やべーぞこいつ!死ぬ間際だつてのに!クソツ!このまま別れと出会の物語くなんて言ったらあの世まで行つて殴り殺してやる!おい、ためーこれどうやって落とし前つけんだよって後ろからなんかきた

!?

ミサト「…ATフィールド展開！主砲斉射用意！このままエヴァを！なんとしてもフォースを止まらせるわよ！」

日向「主砲直撃！ですが！アダムの生き残りが…っ！」

ミサト「落ちる…!!」

綾波「何…リンクが…この模様は…!？」

ミサト「…っ！ヴンダーにゼーレの奴らが侵入してきたわね…」

アスカ「クツ…！コネメガネはシンジの方を！」

マリ「理解！」

アスカ「というわけで死ぬオラああああ!!!」バンツバンツバンツ

エヴァ零号機似「…？」カッ

アスカ「ずっるー！ゼーレのやりそうなことね…時間もない！取り憑いて自爆する！」

ミサト「修理代が…」

リツコ「そういうこと言えないわ」

カヲル「上のは僕が止めるさ…」

シンジ「そういう言葉は信用ならねえって一応学んだよ！どうすりゃ良い…!!」

カヲル「君は安らぎの場所を見つけてくれればいいんだ…」 チュドンツ  
シンジ「ぐなっ!？」

マリ「消えない…ゼーレの保険か!クソツ!どりやつ!」バンツ

シンジ「チツ…!脱出機能はないのか!?俺の責任で世界滅亡とか洒落にならん!」

マリ「言うな!それを言うなら姫を助ける!第九の使徒とは何もかもが違うんだ!今度は助けられるんだ!!」

シンジ「知るかよ!てめーみてーな見た目詐欺は黙ってる!」

マリ「な、何を…!これか!」バンツ

シンジ「出れるか!」バシユウウウ

マリ「よしっ!私は私で逃げ切らなきゃ!」

シンジ「無事に地面に落ちてくれよ頼むぞ…!!」

…いや、待てよ。さっき見た限りだとどう考えても瓦礫にぶち当たって首ごしやつ死亡!しか見えんが。た、助けて!そうだ、綾波!あのクツソ似てる綾波は!?!…いや、ダメだ!あいつもNERV側だった!やつべ!!

数分後

シンジ「ふごつが!」バゴンガゴンツ

シンジ「…内側からどうやって出んのこれ…!」

アスカ「ふんっ！」バギツ

シンジ「おお！助かったって猿かよ…」

アスカ「…何よ！文句あるわけ!？」

シンジ「どーせならここで蓋が開いて、夢オチだったらなー！って考えてただけだ」

アスカ「それ、本気で言ってる？」

シンジ「父親に父親してもらいたいくらいには、本気で」

アスカ「要するに大体諦めてるってわけ。アンタにしては思い切りが良いじゃない」

シンジ「お前が絡むと大体諦めがつけるからな。綾波はー…おつた。すまんなー巻き込んで」

綾波「大丈夫、碓君は？」

シンジ「…お前俺が知ってる綾波とは違うのに答えがほとんど一緒なのが逆に怖い…」

綾波「怖い？何故」

シンジ「検索にかける時みたいな言い方は似てないな」

アスカ「そうかしらあ？って…ここじやL結界濃度が強すぎるわね。リリンが来れる場所まで移動するわよ」

シンジ「リリン…人間のことが」

綾波 「∴」結界濃度∴？」

## 第15話

やばくなった第3新東京

シンジ「まさか猿なんかと一緒に歩くことになるとは」

アスカ「何よそのセリフ。私がいなきやここで皆飢えて死ぬのよ？」

綾波「…喧嘩は良くないわ」

シンジ「だよなく！お前はそこら辺本当よくわかってる！」

アスカ「…それ、褒めてんの？」

褒めてんだよ。一応。しかし、第三新東京ってマジか？…ここってどーせ海の藻屑と  
なった横浜とかの干潮時だろ？…疑うのは良くないか。この世界も変わってんなく、俺  
のせいだけ。世界が真っ赤に染まってるのはなんだかロマンチックですごく喜びそ  
うなやつはいるけど、残念夕日じゃないんだな。

シンジ「うるせー、俺の口から褒め言葉が出るときは捨て台詞として覚えてろ」

アスカ「はあ？アンタばかあ？」

シンジ「…お前、そんな口調だっけ？」

アスカ「え？」

綾波「多分、碇君が暴走しすぎて言う暇が」

シンジ「俺が悪いってか!？」

アスカ「そうね!全部アンタが悪い!!」

シンジ「テメエかかってこいや!ちよつと生きてるからつて調子乗んなよ!？」

アスカ「私に手を上げるの?いやね、これだからガキは」

シンジ「ふんっ」ゲシイッ

アスカ「!？」

「…こいつ、もしかして猿じゃなくて偽物?え、俺ずつと他人を蹴ったりして生きてきたからお前…さては偽物だな??それともアレか?寝てる間に幼児退行したか???ま、まあなんだかわからんが、とにかくどうなってるんだこいつの記憶」

アスカ「さ、サイツテ…!」

シンジ「んなことより先に進もうぜ。コンクリくらいなら壊せるからさ」バギッ

アスカ「相変わらずイカれてるわねアンタの身体能力」

綾波「…私も」

アスカ「何よ、初期ロット」

綾波「私も、出来る」

アスカ「え」

シンジ「さて、真っ直ぐ歩いてりやどっ」ジユゴオオオン

綾波「…」

アスカ「え!?!ちよ、シンジ!?!」

綾波「大丈夫。多分」

シンジ「…綾波、お前さ。少しはまともで居てくれ」

綾波「碇君。安心して。貴方は私が守るから」

シンジ「本物を言わなくても」

アスカ「ちよ、ええ!?!なんで瓦礫に埋まって平気なのよ!?!」

綾波「次、行きましょ」

シンジ「そーだな!?!で、どこ向かうの?」

アスカ「…ヴィレが開発した、相補性I結界浄化無効阻止装置って言うのがあるのよ。その周辺にリリンは住んでるわけ。そこまで辿り着くのが目的よ」

シンジ「だつてよ、綾波」

綾波「私、そこまで行けないわ」フルフル

行けないわ（フルフル）可愛すぎんか。ちよつと今の録画しておきたかったかなーつて。思っちゃいますね。まあそれと同時に猿の相補性うんたらかんたらうんちゃんなんちやんつて言うのは吹っ飛んだんだけど。何それ、説明してくんね?」



シンジ「…らしいけど」

アスカ「アンタバカア!?そこまでついてきてアンタどうすんのよ!!」

シンジ「あー、そこらへんにトウジとかケンスケ、いるかな〜?」

アスカ「さあ?死んだんじゃない?アンタのせいで」

シンジ「お、それもそうだな…見つけた、AirPods」

アスカ「それで何を聞くのよ…」

シンジ「まあまあ、見てなつて」ニヤリ

綾波「…音楽?」

シンジ「俺の持つてるこいつは中々にハイテクなんだわ。こいつのBluetooth

hをAirPodsに繋げる」

アスカ「無理でしょ」

シンジ「うらっ」ポチッ

アスカ「て言うか、そんなことやって何になるのよ?」

シンジ「…そら、アレだよ。アレ…うん。意味ねえや」

アスカ「ならやめときなさいよ」

シンジ「人生は全て無駄じゃないだろ!!」

アスカ「知らないわよ!!」

数分後

シンジ「…んで、どこにその相なんたらはあるんだ」

アスカ「さあ？ 確か、こっちははず…」

シンジ「確かって、お前な…」

綾波「碓君は、知らないの？」

シンジ「知らんね。俺はなんも知らん。知らんから、聞いてるのだ」

綾波「そう、そうなのね」

シンジ「そうなんだよね」

と、あの猿に威圧を掛ける意味も兼ねて会話をする。猿を見る。ストレス溜まってそう、ちよつと触るのやめとか。ストレスの巻き添いで殺されるのは勘弁したい。頼むぞ。いや、俺が殺されることは絶対ないけど。

シンジ「…はあ。とりあえず、頼んだぞ。マジで」

アスカ「わかつてるわよ！ は…：…ったく！ なんで私が」ブツブツ

綾波「何故、彼女は怒っているの？」

シンジ「彼女は初めて知った感情を手放さずに持つておくタイプだからさ」

綾波「そう…：持ち物を大切にするタイプなのね」

アスカ「ちよつと待てやゴルア！」

シンジ「お前は道案内をしろ」

綾波「ええ。そうね」

アスカ「…何よ、会話が噛み合ってるのかどうか全くわからないじゃない…!」

シンジ「何言ってるんだこいつ」

綾波「碓君、トイレがしたいわ」

シンジ「何言ってるんだ、こいつ」

アスカ「トイレは私が行ってあげるから!ほら、来なさい!」

綾波「…」ズルズル

シンジ「なに、やってんだ。あいつら…」

…これ、俺どうすれば良いんだろ…女が買い物に行ってる間の荷物持ち男みたいな、アレだよね…?クソツ、どうして世界が消えた後もこう言うへんな思いをしなければならぬのだ。イカれてる。最高にイカれてる。

シンジ「ん、車だ…そういうえば前は気軽に人の車触れなかったしな…」

???「お、これは懐かしい顔だな」

シンジ「…ぬお、お前は」

ケンスケ「久しぶりだな。シンジ。分かるか?ケンスケだよ」

シンジ「随分とデツカくなったなあ」

アスカ「…あー！ようやく生存者いた！じや、早速私たちを村に運んで！」

ケンスケ「態度はより大きくなってるな」

シンジ「傲慢すぎる…」

綾波「お願いします」

ケンスケ「ハハツ…え、綾波？」

## 第16話

## 第三村

トウジ 「車の中でいつの間にか寝てたつちゅーから、どーせ疲れとっただけやろ」

シンジ 「…これは？」 スツ

トウジ 「ホテルニュー淡路」

シンジ 「ふむ、本物か」

トウジ 「なんや!? 疑つとるんか!？」

シンジ 「…いや、俺は実質タイムスリップだから…」

トウジ 「ん、ま、まあそうか…んじや、説明するで。俺は鈴原トウジ！今は医者やっ

とる！」

シンジ 「医者ねえ」

トウジ 「ま、医者と言つても医者の真似事、独学やけどな」

シンジ 「縄文時代で同じこと言えんのかお前。んで、他の二人は？」

トウジ 「ああ、綾波か？綾波は一緒に寝とった。今はそこにおるはずや」

シンジ 「どーやらあの猿は一人起きてたらしいな」

トウジ「変わつとらんなあ」

そういうお前もさ。その関西弁が第三東京にいてよく変わらないのはなんだよ。確か中学で関西弁使う奴つてトウジ以外いなかっただろ。んー、いたのかな。妹も関西弁だったから、関西と関東で派閥でも作られてたのか。来て1年も経たずにニアサード起こしてたしよく知らずにあの学年ともおさらばしちやったから仕方がないな。

シンジ「それで、ここは？」

トウジ「ワイの病院や！と言つても、学校を勝手に拝借しとるだけやがな」

シンジ「そんなことも出来るんだな。ここに来るまでのサバイバルはケンスケから？」

トウジ「よー分かったな。せや、ケンスケがおらんかったら全員死んでたやろうしな」

綾波「…」

シンジ「!?」ビクッ

トウジ「おお、そつちも起きたか。村を案内するで、こつち来な」

全く、綾波の背後を取る術は心臓が凍る。後で教えてもらおうかな。そう思いながら学校を出る。ていうかトウジ、ここ本当に学校か？いや、まあニアサードで大変なことになつて逃げた先に学校らしき建物があるから学校つて呼んでるのか？全くわからんな。学校を出たら段々畑が目に入る。電車もだ。途中、トウジが医者だからか、妊婦と

も挨拶をしていた。よく聞いてなかったが、俺たちが何かの組織から来た人間だと思われているらしい。そっちの方がいいか。

シンジ「…おー、すげえ」

綾波「ここ、不思議。人がいつぱい」

トウジ「…なあ、綾波ってあんな感じやったか？」

シンジ「はつきり言ってる俺にもわからん…ただネルフでは綾波って呼ばれてた。俺の知ってる綾波ではないらしいが」

トウジ「ほーん…つまり記憶喪失っちゅーことやな」

綾波「記憶喪失…違うわ、私は」

シンジ「記憶喪失だろうとなんだだろうと新しい場所であれば同じだ。さて、俺たちはどうするかね」

綾波「どうする…ここでは、何をするの？」

トウジ「せやなあ…二人とも働いてもらうで！」

ケンスケ「碓は俺が預かるうかな」

トウジ「んー、まあワイら3人トリオの中で一番力の強いシンジが行けば力仕事も楽になるかもしれんな」

ケンスケ「さあ、こっちだぞ碓」

トウジ「…さて、ソックリさんは仕事やな！」

綾波「ソックリ？」

トウジ「おう！今日からのお前の名前や！いや、仮の名前…んー、わからんなあ」

綾波「私は、綾波・ソックリ・レイ？」

トウジ「んなわけあるかい…」

ケンスケの家

ケンスケ「信じられるか？委員長とトウジが結婚したんだぞ？トウジももう一児の父親だ」

シンジ「信じられん…というより、ああいうのがうまくいくんだらうな」

ケンスケ「ま、ニアサードの後の苦勞が二人の縁結びだったんだらうさ」

…聞けば、ヴェイレのクルーは大半がニアサードを恨んでいるらしい。当然だが。しかし、ここ第三村の人間は、今の生活を生きるのを全力で、ポジティブにしているらしい。なんだかよくわからんが、ニアサードのおかげで会えた人間もいると自分なりに満足している人間とか、新天地で頑張ろうとか思っている人間がいるらしい。そんな心意気が有ればとてもいい人間なんだろうな。例えば釣りが出来たり…

ケンスケ「…いつまで釣りの結果引き摺ってんだよ礎。お前らしくもない」

シンジ「うっせ。今を精一杯生きるのやつてる奴がいる村だとその時の結果にしか目



が行かないんだよ」

ケンスケ「ハハ…さて、ここが俺の家だ。トイレはそこにあるぞ。さて中に…」ガチャツ

アスカ「…何よ」

ケンスケ「シンジ、言い忘れていたな。アスカは事情があつて今村に顔を出せないんだ」

シンジ「そういうもんか。事情は人それぞれだしなあ。」

アスカ「何、私の裸を見ても赤面すらないでその上に無視？」

シンジ「不思議だな、お前の裸は見る気がしない」

アスカ「なんですって…いや、いや…」

ケンスケ「凄いな碇…」

アスカ「それで？食料を集めて贖罪のつもり？」

ケンスケ「ちよっ」

シンジ「ケンスケ。止めるなよ」

ケンスケ「ああ、もう、2号機が日本に来た時以来じゃないか…！」

その頃第三村

綾波・ソツクリ・レイ（仮称）「私、綾波・ソツクリ・レイ。よろしく」

おばちゃんA「長い名前だねえ…んー、綾波じゃダメなのかい？」

綾波「私もいいと思う。けど、私以外に綾波がいる」

おばちゃんB「何言ってるの、私なんか苗字が鈴木でこの村だと12人くらい被ってるわよ」

綾波「…苗字は被ってもいいものなの？」

おばちゃんA「親からもらった名前と苗字なんだから、変えられっこないよ」

おばちゃんB「さて、綾波さん。仕事、してもらおうよ！」

綾波「仕事…仕事って、何？」

おばちゃんA「そう来るかい…そうね、皆んなで汗水垂らして動きましようってことかね」

綾波「汗水…」

一方その頃ケンスケ宅

シンジ「どうりやあ！」ブンツ

ケンスケ「で、出た!!使徒に通用するシンジの巴投げ!!」

アスカ「そんな古臭い技、通用しないわよ！」ブンツ

ケンスケ「回し蹴りだああ!!」

…ケンスケ、お前意外とそういうところにも知識使ってるんだな。驚きよりも何より

もちよつと怖いわ。それ以上に巴投げは使徒の触手を使った遠心力で投げただけだからな。勘違いするなよ。しかし、エヴァアじやないと結構疲れるな…14年間眠ってたからかな。あれ、下手したら死ぬの俺じゃね？

アスカ「ふんっ！」 シャツ

シンジ「ジャブか！だが無駄だ！」 グゴツ

ケンスケ「骨に入った!!しかも下顎!!」

アスカ「ぐっ…」 フラ

ケンスケ「つて、違う！ストーツプ!!もう勝負はついただろ!!」

シンジ「チツ！」

アスカ「ほんつと…サイツテー…クズが…」

シンジ「…ザコが」

ケンスケ「ハハ：そうだ、碇。綾波の様子も見てきてくれないか？ここに住むんだつたら仕事内容もある程度覚えておかなきゃいけないぞ」

シンジ「それもそうだな。つたく、石で頭ぶつ叩きやがって…」

ケンスケ「…あれは流石に度を超えた喧嘩だよ…」

アスカ「ケンケンも十分楽しんでたじゃない？」

ケンスケ「うぐっ」

## 第三村

シンジ「綾波〜」

綾波「碓君」

おばちゃんA「何よ、綾波さんで合ってるじゃないの」

綾波「そうらしいわ。それで、何？」

シンジ「俺も仕事覚えてこいつでケンスケから言われてな」

おばちゃんB「それじゃあ、この野菜を洗ってもらおうかな」

シンジ「…折らないように気をつけとこ…」

その後、俺は、まあ、なんと言うか。爪を切つて手を洗い、野菜を洗った。田植えもやった。こればかりはネルフで年に一度あるつて言う謎の行事でやった田植えの経験が活かされた。あの時の天然酒樽は確か、『麦ビールが増えるわあ!』とか言つてたな。その時はうっかり田んぼに沈めるところだったけど、今だったら完全に沈めてるな。うん。

シンジ「…3本掴んで…真っ直ぐ…」

おばちゃんA「どっかでやってたのかい？」

シンジ「最近、一回。父親の付き添いで」

おばあちゃんB「お父さん?どこかにいるのかい?」

シンジ「…いえ、父親との関わりはあんまりなくて…家庭内別居したまま母親が死んでまして」

おばちゃんA「ああ、そうかい。すまないね、そう言うこと聞いちゃって」

おばちゃんB「まあ、ここはそう言う人が多いからねえ。今更不思議がらんよ」

綾波「シンジ君のお父さん、死んだの？」

おばちゃんA「ちよつと、そう言うこと聞いちゃ」

シンジ「綾波、お前は知ってるだろ…」

綾波「…？」

おばちゃんB「それじゃあ天然かしら？可愛くて天然だなんて、羨ましいわあ」

…そいつ、結構やばいですよ。そう言わない俺は、優しい。優しい…はずだ。多分な。そう思いながらケンスケの家に行き、綾波の様子を伝え、寝る。さて、ヴィレは一体いつ来るだろうか。そこら辺分かりたいが、あいにく赤毛サルとは険悪な仲。無理だな。

翌朝 ケンスケ宅

アスカ「…チツ。寝たふりも飽きて来るわね…」

シンジ「ふっ！ふっ！」ブンツブンツ

アスカ「アンタのせいよ!!」

シンジ「あ!？」

ケンスケ 「二人ともうるさいよ…」

## 第17話

## 第三村

シンジ「おー、ここはペンペンがいるのか」

ケンスケ「懐かしいだろう？ペンペンはあの海洋生態系保存研究機構にいたペンギンをまとめてただろ？」

シンジ「…ん？ちよつと待て、ペンペン多くね？」

ケンスケ「まー、温泉ペンギンだけど、生き残れる場所で繁殖したんだろ。これも多分ヴィレのやったことだろうけどね」

シンジ「へー。」

綾波「ペンペン…」

シンジ「うおつびつくりした」

全く心臓が悪い。そう言えば先日こいつがケンスケの家を訪ねていた。サル…訂正、アスカと言いつつ合っていた。綾波はいつどこで覚えていたのか、巴投げを喰らわせたいたな。その後、飛んでいたアスカに対して両腕で飛んで、蹴りを喰らわしていた。あれは良い格闘家になる才能を持っていたな…いや、素晴らしい。つか両腕で跳ぶって頭イ

かれてんのか。俺でもできねえぞあんなの。

ケンスケ「相変わらずびっくりさせるのが得意だね綾波は。さて、仕事は？」

綾波「今日はお休み。当番制で、スバメにも懐かれてるから特別」

シンジ「特別ね……」

綾波「それで、お別れ」

シンジ「ん？お別れ？」

ケンスケ「俺はここらへんで席を外すよ」

シンジ「おう」

綾波「私は、NERV以外じゃ生きれない」

シンジ「……言ってたな」

綾波「だから、さようなら。私も、碇くんと一緒にいたかった」

シンジ「何言ってるんだお前」

綾波「赤い人が、羨まし」パシヤツ

シンジ「……こりや、LCLだな……生きれない場所で生きたらLCLになるのか……L結界密度が高いとか猿が言ってたし、そこに長く居たら俺もLCLに……なるほど？」

ケンスケ「あらら……ちよつと、まずいか？」

そろそろ村に帰るか。帰ってさっさとヴィレを待つとするか。はー、ヴィレなんぞを



待つなんて気分が悪い。いや、正確に言えばあのわがままボディをしていた(ここ重要)わがまま酒樽が艦長やつてるヴンダーか。あの酒樽、俺が自由にやるの許可したくせに、度を超えたらこれだもんな。ぎげんな酒樽、てめえの船13号機で潰しても良かったんだぞ。操作効かなかったけど。ダミープラグがまだあるとは思わないじゃんか。普通。残さねえからな。普通は。

帰路

ケンスケ「ミサトさんもさ、あの時に後悔したことがかなりあるんだよ」

シンジ「ほー？」

ケンスケ「∴その一つはシンジ。お前だ。あの時に言ったことを後悔しているらしい」

シンジ「その後悔って、もしかしてとてつもなく小さい後悔じゃねーか？」

ケンスケ「その二つ目が、ここ。ヴィレの下位互換的な組織のキャンプ場にある。」

シンジ「まさかとは思うけどさ。ミサトさんと加持さんのご子息、だなんて言うなよ？」

ケンスケ「勘がいいな。一度会っておくといい」

キャンプ場

リョウジ「どうも、先生。そっちは新しい助手ですか？」

ケンスケ「そんなところだよ」

シンジ「よろしく。リヨウジ君」

リヨウジ「…なんだか、第一印象最悪って言われませんか？」

シンジ「君結構キツイこと言うね。スタンガン持ったりしない？」

リヨウジ「どうやら、僕も君も、何か嫌な関係らしい」

…どうにも、父親と同じく暴れてたらスタンガンなど使う可能性はないらしい。まあ、俺自身あんなのもう二度とゴメンだが。あいつはネルフの人間よりも覆面強盗の方が似合う。罵る意味は全くないけどな。馬鹿にする意味もないが、とにかく気に入らないと言う意気込みはある。

シンジ「…お前の父親と同じく、お前も真つ当な道進まなさそうだな」

リヨウジ「なんです？ それ…僕の父親を知っているんですか？」

シンジ「知るか、ばーか」

リヨウジ「…やっぱり、最悪な人ですね」

ケンスケ「さ、シンジ。帰るぞ」

シンジ「お、待ってました」

リヨウジ「…はあ…どう見ても14歳だよな…？」

数日後 第三村

ケンスケ「…離艦者が多い…とうとう決戦か」

シンジ「しっかし、最近ひどいぜ。日常パートがない」

アスカ「あんたバカア？こんな事態中に日常パートなんて挟めるわけないでしょ!!」

シンジ「バカ!?!てめえサルバカって言ったか!?!言語能力だけがあるサルが!?!」

アスカ「はあ!?!」

ケンスケ「やめろ二人とも。シンジ、お前は別に残つてもいいんだぞ」

シンジ「バカを言え。そのサルじゃ戦力に不安があるだろ。ゲンドウの狙いはな、

恐らく…レイ。それも初号機の中にいるかも知れん」

アスカ「あんた、それ知つてたの!?!」

シンジ「いや、知らん!憶測だ。」

あの時、綾波を引き摺り出して使徒を元に戻した時にいたあの瞬間、周りのことは何一つとして覚えてない、が。あの時いたあの空間が、エヴァの中であれば。引き摺り出した時の綾波は使徒からエヴァ初号機に移ったはずだ。と言うか、そういうのは科学で分析しろよ。全く嫌な奴らだ。あの時に俺しか出てこなかったのも納得がいかない。が、エヴァ初号機は今S2機関…永久機関としてウンダーの中にある。どうにかしてこれに乗らなければな…

アスカ「で、アンタ結局来るんだ」

シンジ「おう」

アスカ「それじゃ、これ規則だから」プシュツ

シンジ「危なっ！」

アスカ「その為の2本目よ！」プシュツ

シンジ「あぎっ！」ガギイッ

アスカ「噛んで止めるって無茶するわね…」

シンジ「ご…歯が…ぎ…」

アスカ「…それじゃ、三度目の正直ってことで」プシュツ

ヴンダー内

シンジ「ぐあっ！」

サクラ「ようやく起きたら!!」

アスカ「うるさっ」

シンジ「…心配させたか…」

サクラ「心配云々よりも、なんでまたエヴァに乗ったんですか」

シンジ「うるさい、泣きながら20超えた娘が腹に顔擦り付けるんじゃない。年齢的にまずいぞ」

アスカ「もしかして私に喧嘩売ってる？」

シンジ「お前はいいだろ実質不老だし」

アスカ「はあ!？」

サクラ「と、とりあえず…良かった」

シンジ「おまそこはつつつ!!」ガッドガッドンツ

アスカ「…こいつ、内股に手を当てると魚みたいに飛び跳ねるから、気をつけなさい

よ

サクラ「ずびばぜん…」

## 第18話

ヴンダー内部

シンジ「あー、結局監視室かー」

サクラ「我慢してくださいねー。また勝手に動かれたら大問題ですから」

アスカ「…DSSチョーカーは？」

シンジ「あんな爆発程度で俺が死ぬかよ」

サクラ「はは：未装着でまあ問題はありません。作戦終了時まで耐爆隔離室において保護します」

シンジ「…なあ、俺はあのへんなベッドみたいな担架みたいなあれに乗らなくて良いのか？」

サクラ「問題ありません。射撃には自信あるので」

アスカ「諦めなさいシンジ。容赦なく撃つわよ」

なんだろうな、こいつらの『ええ当然やりますよ？』って感じの当たり前を聞かれた時に馬鹿にする感じ。ここに使徒が来れば良いのに。第六の使徒来てバケモンビーム撃てばいいのに。ヴンダーなんか来るんじゃないかなかった。第三村にいれば良かったか

なあ。第三村は結構仕事キツそうではあるけど。ケンスケのお供してたら結構良い線行けるんじゃないかな。ヴンダーが全部なんとかしてくれるっしょ。

シンジ「はー、めんど」

アスカ「て言うか、何で葛城艦長は乗艦許可を出したのよ」

シンジ「元わがままポデイだからな。わがままなんだろ」

アスカ「嘘でしょ、あんたたちそんな仲だった訳!？」

シンジ「いや、加持さんから聞いた。お子さん可愛いですわって言う暇もなかったけどさ」

アスカ「ええ…」

ヴンダー操縦場所

北上「式波少佐の回収はいいですよ。けど何であのキチガイ疫病神も一緒なんですか？」

青葉「あのまま放置してNERVに連れていかれるよりはマシだろ。て言うかキチガイ…あれでも一応この艦内では一番強いぞ彼」

北上「そんなの関係ないですよ!」

多摩「エヴァ搭乗を画策時には総員に無条件発砲許可が出てます。前よりは安心ですよ」

北上「そんなの言うだけ番長でしょ？前に脱走した時艦長は処分できなかつたし、今やその信用ナツシングなんだけど」

長良「相手は子供です。躊躇も理解します」

北上「その子供がニアサー起こして私の家族皆殺しにしたんだけど」

日向「ニアサーは結果だ。彼の意志じゃない。艦長はいつも贖罪に尽くしている」

高雄「そうだな。加持が信頼した艦長だ。ワシはどこまでも艦長を信じる」

北上「皆清めれば済むとでも：そんな訳ないっしょ」

ヴァンダー耐爆隔離室

アスカ「ただいま」

マリ「ヤツホー姫。ベリー会いたかったよん」

シンジ「よう」

アスカ「何でこいつまでいる訳!？」

シンジ「しっかしここは本だらけだな」

マリ「本は人の英知の集合体。古今東西全ての本を集めて読むのが私の叶わぬ夢よん」

シンジ「…燃やすか」シユボツ

アスカ「ちよちよ、爆発物あるからそれは」



マリ「それはいくら何でも殺生だにやあ!」

シンジ「あつ、そうなんだ：俺は隣の部屋にいるから、ムカついてストレス発散したくなつた時以外はいつでも来ていいぜ」

マリ「全く危ない：自己紹介ってこと？」

シンジ「知るかばーか」

シンジ版耐爆隔離室

シンジ「：あいつらの部屋から幾つか本盗んできたけど、全部小説：しかも全部言語がバラバラ：あいつ何人だ？サードインパクト前までで存在している多言語話者の最大は58ヶ国語：翻訳眼鏡でも付いてんのか？あの女」

そんな事はさておきだ。そんなメガネも有れば試験とか楽だろうなーっていかにも受験生なことを考える。考えるのは気が乗らない。監視カメラをジーっと見つめて、ダブルが欲しいだのサンドバッグが欲しいだの愚痴りながら時間を潰して。全く父親がやべー奴だからあいつらどうすんのかとも考えて。あーあ、あいつが人辞めたら俺も人やめる的な、そんな感じの血縁関係で芽生える力！とかないもんかなあー。

シンジ「いや、ないか」

サクラ「シンジさーん、お望みのサンドバッグですよー」

シンジ「うっそだろお前聞こえてたのかよ」

子種保管場所

リツコ「クレーデイトの独立運営とエヴァ両機のリミッター解除を承認するサインをこれに」

ミサト「はあ……」ピツ

リツコ「艦長、副艦長、両名の承認を確認。マヤ、始めてちょうだい」

マヤ『了解です、副長先輩』

リツコ「ミサトが一人のときはいつもここ。艦長室のプレートはこつちに替えた方が良さそうね」

ミサト「ここの空気が気に入ってるだけよ」

リツコ「そう言つて、簡単にはリョウちゃんへの思いは断ち切れないのね」

ミサト「加持は関係ない。本当よ」

リツコ「じゃあ、そのポケットにある写真は何かしら」

ミサト「……やっぱリツコには勝てないわね」

リツコ「自分の子供と、自分の弟のような存在だった彼のツーショット。違う？」

ミサト「残念、ツーショットじゃないわよ。それに、あんなに大人しい弟は知らないわね」

耐爆隔離室

シンジ「お前が来るかよクソが」

アスカ「サンドバッグが届いたんでしょ。私にも使わせなさいよ」

シンジ「お前とはリアルファイトで行くぜ」

アスカ「は？」

そう言った後、俺はアスカに対して足払い、プラグスーツの首元を無理やり掴んでサンドバッグへ投げ飛ばす。止める人間がないのは幸か不幸か、それともチョーカーが無いのが良いのか、アスカもガチでやる気だ。アスカの掌底が迫る、しかし俺は華麗にかわしアスカの顎へ一撃。腕が上がりきったところから肘で肩を追撃。これでアスカは気絶する筈だ。勝利の10カウントをしていたら、アスカがボソリと言いやがった。

アスカ「女をいきなり殴ってくるなんて、サイツテー……」

シンジ「サンドバッグがあるからって人の部屋に入ってきて暴れるつもりだった奴に言われたく無いね」

ミサト『何をやっているの、二人とも』

シンジ「やべっ」

アスカ「こいつが、タチの悪い言いがかりをつけて来たのよ」

シンジ「…まあ、その通りか」

ミサト『そういう事は出来るだけ慎んでくれるかしら。シンジ君も、アスカも』

シンジ「君付け……」

アスカ「わかってるわよ。こいつが何もしない限りは、私は何もしないから」

シンジ「じゃあ出てけ」

アスカ「何よ、私が折角会いに来てやったのに」

シンジ「俺は神じゃ無いから来るもの拒むぞ」

アスカ「じゃあ去るもの追いなさいよ、ガキシンジ」

シンジ「俺は仏じゃないから、次で仕掛けるぞ」

アスカ「はあ？あんたにその度胸がある訳？バカシン」

シンジ「死ね！」ドロップキック

ミサト『今のはアスカが悪いわね。シンジ君、暴力沙汰はやめてくれるかしら』

セカンドインパクト爆心地の少し前 ヴンダー内部

高雄「全く、艦長も無茶を言う」

青葉「昔からですよ、それは」

日向「無駄口を叩くな。戦闘配置につけ」

高雄「誓いの印を巻いてるから少しくらい良いだろうに」

サクラ「私は医療ブロックに移動します。碇さんはそこを動かんといてくださいね。

何かの時は赤いボタンで呼んでください」ガチャツ

## 耐爆隔離室

マリ「深々度ダイブ用耐圧試作プラグスーツ。いかにも出来立てホヤホヤにや」

アスカ「ここは無垢の下ろし立てでしよ。死装束だもの」

シンジ部屋

シンジ「…また来たか」

アスカ「ええ、またよ」

マリ「さて、だーれだ」

シンジ「うわびびっくりした」ゴンツ

マリ「いにやっ?!?…これは姫の言った通り、凶暴だにや…」

シンジ「あービビった…で、お名前は？」

マリ「自己紹介、まだだったっけ？私はマリ。真希波・マリ・イラストリアス。改め

てよろしくね、凶暴なワンコ君」

シンジ「ごめんちよつとキツイ」

マリ「はあ!?!」

アスカ「さて、時間も結構あつたんだし、あの時私がガラス越しにアンタを殴ろうとした理由、分かった？」

シンジ「…手合わせがしたかった！」

アスカ「全然違う。ガキね」

シンジ「次言ったら死体がエヴァに乗るぞ」

アスカ「私が3号機に乗ってた時、助けることをせず、ただただ私を殺そうとしたからよ。普通、助けようとするモンでしょ？まあ、何もしないよりはマシだったけど」

この女はいつのことを引き摺ってるんだ。14年前のことだぞオイ。むしろダミーシステムのほうがやばかっただろ。何だ、助けようとすればよかったのか？とか思いつつ次はそうすると答えたらまた乗っ取られると思ってるのかと二人がかりで大声で怒鳴られた。耳が死ぬほど痛い。お前ら2回くらいダミーシステムのせいでもやらかせば良い。

アスカ「…まあ、アンタの強さは一番だったし、私も正直そこが好きだったんだと思う。その性格さえなければ、今も好きだったかもしれないけど、私が先に大人になっちゃったし」

マリ「私も姫絶賛なワンコ君のお弁当食べたいなあ」

シンジ「…アスカに弁当作ったことなんか一度もねえぞ」

マリ「え？」

アスカ「…」

マリ「ひ、姫？」

アスカ「何よ、綾波レイから貰ったって何が悪いのよ」  
シンジ「お前ガチのクズだな」

## 第19話

セカンドインパクト爆心地（保管ユニットの射出は少し飛ばさせていただきます）  
ヴンダー

長良 「旧南極爆心地エリアへ進入。L結界境界面に入ります」

北上 「うわうるさっ」

長良 「L結界境界面を航行中。問題ありません」

北上 「……ここが原罪で汚れた生命を阻むというL結界の上」

高雄 「人類がその浄化されたエリアを祝福も受けずに進んでいる。加持のデータとア  
ンチLシステムののおかげだ」

長良 「L結界潜航可能ポイントまであと20」

ミサト 「了解。全艦潜航じゅ」ドカーン

リツコ 「……いつもこうね」

多摩 「右舷第2船体に被弾！損害不明！」

北上 「3時方向に艦影発見!!」



エアレーズング『どおおおん』

リツコ「オツプファータイプ搭載型2番艦、エアレーズング。やはり完成していたのね」

冬月『すまん。今少し、碇のわがままにつきあつてもらおう』

日向「第13号機再起動までの時間稼ぎか」

その頃のシンジ版耐爆隔離室では

シンジ「…アスカもあのメガネも行った…さらに今の爆発…あれ、もしかしてこれ俺が一番安全では？」

そう考えるとここにいるのも気分が良くなってきた。早く寝て起きて、起きたら世界救われてましたエンド、これで良いじゃないか。僕は関わらない。関わりたくないんだ。よし、そうと決まれば狸寝入りしよう。

戻つてヴァンダー操縦場

リツコ「同じ神殺しの力…厄介ね」

ミサト「タイマン上等！右舷砲撃戦用意！ネルフ艦を牽制しつつ潜航ポイントへ急ぐ。撃てえ！」ドンドンドンドン

北上「…あれ、なんか効いてないっぽくね？つてなんかこつちに!？」ドオーンツ  
多摩「また来た！」ドオーンツ

北上「あちこちに被弾！あっちの火力の方が圧倒的です!!」

多摩「くそ！どここが同型艦だよ！」

高雄「未完と完成の違いだな。だが主機はこっちのほうが、上だ！」キューーン

長良「L結界潜航可能ポイントに到達！急速潜航します！」

ミサト「…私のセリフ…」

リツコ「いつまでやってるのよ」

日向「(使徒が来た時も毎回あの人台詞を遮られてムカついてたなあ)」

長良「L結界、第一層を抜けます！第二層に突入。L結界密度プラス30」

北上「艦首12時方向！エヴァインフィニティの大群です」

ミサト「構うな！このまま」

長良「このまま突っ込みます!!」

リツコ「…」

北上「艦首12時方向に艦影出現！」

日向「待ち伏せか！」

ミサト「(私たちの行動筒抜け過ぎないかしら？誰かスパイでもいるの？ダメね、そんなこと考えてちゃ…いやでも台詞が遮られるのはちよつち堪えるっていうか、うーん…

決戦前にスパイがいるなんて言ったら艦内ギスギス…やめとこ)」

リツコ「3番艦エルヴズユンデ！まんまと挟撃されたわね」

多摩「やばいです！これ以上やられると航行に支障がつあ！」「ドーンッ

ミサト「艀装が手薄な3番艦から排除する。舵そのまま、最大戦速！」

長良「了解！」

日向「3番艦回避行動！逃すな追え！！」

ミサト「そうだ！このままぶつける！」

その頃シンジ

シンジ「…ふっ！ふっ！ふっああああ！？」ドギヤアギギギギ

くそっ！なんだよ、なんなんだよこの艦は！！空飛ぶ船なんだから他を追従させない素

早さと防御力持たせろよ！！葛城か、葛城ミサトが一番やばいのか！？どうなんだ、おい！！

…すっ転んだ状態で考えることではないか。うん。

ヴンダー

北上「こんなのやだー！」

ミサト「艦を回せ！ロール角180度！敵艦と体勢を入れ替える！」

長良「了解！」バーンッ

エルヴズユンデ『んのおおおおお』

冬月『3番艦を盾に使うか？フツ、相変わらず無茶をする』

北上「インフィニティの群れを抜けました！L結界第三層に突入！」

青葉「目標、ネルフ本部を確認。既に黒き月の下方にシフトしています」

高雄「第13号機の再起動が近いな」

日向「2番艦および3番艦、艦尾より接近中」

ミサト「時間がない。黒き月を盾にしつつ、このままネルフ本部突入コースに。誘導

弾発射準備、目標第13号機再調整区画」

北上「艦尾6時方こつやあ!」ドーンッ

ミサト「艦を傾斜、被弾面積を最小限に抑える」

長良「了解……！」

リツコ「主翼上の艦艇群の保護を最優先。A.T.フィールドを集中して」ドゴォ  
ンッ

北上「艦尾主砲が大破！袋にされています！」

ミサト「うろたえるな！発射ポイントまで耐えれば良い」

長良「誘導弾発射地点に到達しました！」

日向「誘導弾、全弾発射！」シュードーン

青葉「最終目標、第13号機を光学で確認！」

リツコ「予想通り再起動前だわ。13号機はまだ動けない」

北上「接近中のエヴァ7シリーズを確認、数は超いっぱい！計測不能です！」

ミサト「雑魚にかまうな！エヴァ両機の射出を急げ」

リツコ「マヤ、エヴァ両機射出準備」

マヤ『了解、エヴァ両機を射出準備！』

リツコ「射出！」

その頃シンジ

：なんだろうか、こう、自分の出番がないとこうもきついのか。今までセリフ遮ってきてなんかすまなくなってきたな。これからもうちよつと他人の考えとか害さないように生きよ。あ、いや、でも俺こう考えれてるってことはつまり、あれか。俺もうこれだけで他人のセリフ害してんのか。なんか、すまん。ほんと。

黒き月周辺

ミサト『頼むわ、マリ。アスカ』

アスカ「うおっ!?キモっ！」

マリ「にやあ!?!なんにやこいつら！」

アスカ「どけー！」シユドドドド

マリ「ひやつほーい！」

アスカ「このキモ骨どもが!!」バババババ

マリ「姫、それは言い過ぎじゃ…どけ！おら！ふんっ！」バギツバギツバギイツ

アスカ「どりやあああああ…チツ、んんっ！」バゴオツ

マリ「次の獲物ね！」ブンツ

アスカ「おりやあああああ…!!!って嘘!？」

マリ「姫扱い悪すぎ！」

アスカ「んんっ！このっ！離れる!!」

マリ「ほいほいつ！」ボギイツ

アスカ「よし！どれっ！ほれっ！おらっ！」ボギイイツボギイイツボギイイツ

マリ「必殺二刀流！だにゃん」ボギゴギツ

アスカ「どけってのよこの！」

マリ「退け退けー！姫のお通りだー！」バババババ

エヴァ7「あんなの俺知らないんですけど」バギイツ

マリ「喋った!？」

アスカ「ふん！エヴァもどきが、喋るに飽きず、まとめて通せんぼするなんて邪魔く

さい！」バシユンツバシユンツドオーンツ

マリ「しぶとい奴らだにゃ！」

アスカ「コネメガネ！手を貸せ！」

マリ「心得た！」バギイイイインツ

アスカ「勝手に消滅しときなさいよ……！」ググツ

マリ「んにやにや……!!」

アスカ「よし、抜けた！」ドンツ

青葉『エヴァ両機！ネルフ本部に到着！』

アスカ「目標地点はあの下ね！」

初号機の肩？「じやりん」

アスカ「小さいから掴みづらいしめんどい！」

マリ「姫！お先にどうぞ！」

アスカ「悪い！コネメガネ！」

マリ「私のムチ捌きは別格ね！」バチインツ

初号機の肩？「!？」ドカーンツ

13号機調整区画

アスカ「……さて……と。エヴァ第13号機……間に合った。神の機体をうたつたところで、所詮は人の作り出した第13番目の汎用ヒト型決戦兵器。強制停止プラグをコアに打ち込めば、破壊はできずとも、動くことはなくなる。」

マリ『早めに終わらせてねー!』

アスカ「うるさい！…これで！おしまろ！いい！！」ブンツ

エヴァ新2「！！」ガギイインツ

アスカ「ATフィールド!? 13号機はATフィールドを持たないはずなのに!! これって、もしかして新2が13号機に怯えているっていうの!?!」

その頃ネルフ本部地上?では

マリ「流石に数が多くてきついなー…って取り憑かれた!?!」

初号機の肩「…」ピピピピピッドカアンツ

マリ「んんっ!!…何か、おかしい…ゲンドウ君はなにをたくらんで…?」



## 第20話

黒き月周辺

北上「あ、変です！ネルフ戦艦が戦線を離脱、降下していきます」

ネルフ戦艦達『キュー…』

ミサト「呪われたセカンドインパクトの爆心地、カルヴァリーベースか…地獄の門が再び開いている？まさか！」

リツコ「…ミサト」

ミサト「光の翼？セカンドインパクトと同じ方術でフォースを起こすつもりなの？」

リツコ「いえ、ガフの守り人として建造された船をトリガーにはできないはず。それに、黒き月を取り巻く事象が計画とは違う。これはゼーレのシナリオにない、私たちの知らない儀式よ」

ミサト「全くの予想外、アナザーインパクトというわけか。状況はどうあれ、ネルフの計画は全て叩き潰す！」

北上「なんか黒き月が変わってませんか？」

高雄「知るかよ」

ミサト「主砲発射準備！3番艦から先に沈める！」

日向「使用可能な全ての砲門を3番艦に向ける！」

北上「いつも思うんだけど、光の点滅で目とかやられないわけ？日向さん」

長良「今はどうでも良いでしょう」

ミサト「私語は慎め。超電磁直撃弾装填。方位盤、連動不要！各砲準備でき次第発射開始！」

リツコ「しかし建造計画では4番艦まで」

ミサト「撃てえ！」

リツコ「(そんなんだから人にセリフ遮られるのよ)」

4番艦『ぬおおおっ…』

北上「下から!？」

ミサト「状況は!？」

多摩「直撃です！何かに両舷の第2船体を貫通されました！」

日向「艦首損傷！主砲塔システムダウン！」

リツコ「4番艦ゲバート！罨にハマったわね、私たち」

その頃シンジ君

シンジ「うおっ!?おっ!?おおっ!?…地震か!?いや、空飛んでるから地震はないか…」  
ないな、うん。流石に地震はない。俺がいた時代には空飛ぶ船なんかなかったしな。  
うん。言い訳だけど、地震もそんなになかったから、言い訳にもできないしな。うん。  
さて、えーと、うん。間違いなく俺これ状況把握できてないからな。ビデオ通信とかで  
なんか出してろよ。いや、出したらダメか。精神的動揺的なアレか。全くりツコ様は面  
倒だねえ。

次にネルフ本部

アスカ「仕上げのインパクトにはどのみちこいつが必要になる、だから、確実に今始  
末しておくしかない!」

マリ『まだく!?ちよつと少しかなりキツイにや!?』

アスカ「獲物が目の前にいてままならない上に限界が来るなんてストレス!!最後の手  
段ね。ごめん、新2!また無理をさせるわ。全リミッターを解除!裏CODE999  
!」

マリ『裏コードスリーナイン!?…銀河鉄道かにや?』

アスカ「んっ…んぐ…!!この!!」ブンッ

青葉『パターン青!ネルフ本部内に第9使徒の反応あり!』

マリ『ほらっそらっ!!姫、使徒の力を使う気!』

アスカ「さあ…行くわよ…!! エンジエルブラッド…全量注入!」

新2『ゴキユゴキユギイツ…グワアアアアアア!!!』(使徒化)

アスカ「んがああああああ!!!」ドンツツ

マリ「姫、人を捨てる気!」

アスカ「新2のA・T・フィールドを…私のA・T・フィールドで中和する!!」ブ  
チイツ

マリ「やめろ姫!!」

アスカ「うらああああ!!」ズバアンツ

ミサト『使徒の十字架!』

アスカ「あぐっ…ぎやああああ!!…が…! シングルエントリーじゃ…なかったの!」  
第13号機『ズキユツ』

マリ「そうか! ゲンドウ君の狙いは使徒化した姫!! つてええ!」ドーンツツ

アスカ「!?!? 式波タイプ、私のオリジナル…かしら?」

オリジナルアスカ「フフ…最後のエヴァは神と同じ姿。あなたも愛とともに私を受け  
入れるだけ」

アスカ「お生憎さま!」

オリジナルアスカ「フツ…無駄よ、お馬鹿さん」

アスカ「な、何纏キ纏ウ」

マリ「アスカあ!!」

ヴァンダー

青葉「新2号機、全ての信号をロスト!パイロットの状況不明!」

ミサト「エヴァの心配はできないわよ…」

多摩「補機N2機関大破!」

日向「くそ!今度はなんだ!?!」

北上「エヴァっばい何かに取り憑かれました!」

リツコ「パターン青、エヴァオツプファータイプね」

ミサト「パイロットごとマーク9を新造したのか」

北上「パイロットごと!?!」

高雄「綾波レイがクローン体だ。パイロットごと作れるだろうよ」

マーク9『ドロオ…』

多摩「やばいです!艦内が物理的に侵食されていきます!」

リツコ「排除、急いで!」

サクラ『やっていますが侵入速度が速すぎて対処が追いつきません!』

その頃シンジ君

シンジ「ひゃあっ!!?…えっ…と…?…これは、一体…?」

何、この青いの。何、この。これ。これ!!いやー待てよ。確かどつかで見たことあるぞ。そうだな。新しい零号機っぽい羽生やすあいつが最後ヴンダーに出してたな。アレか。全く、パターン青と言いつこの青と言いつ、青は俺たちになんか恨みでもあるのか。青色は一体的なのか?いや、そう考えるとあれだぞ。青と並べて語られる赤は味方になるぞ。この場合2号機が当てはまるな。赤と青を混ぜた紫色してる初号機もまさか…いや、まさか…

戻ってヴンダー

青葉「マーク9、VD防壁を突破!」

多摩「ダメです!コントロールが全部乗っ取られました!」

北上「つてことは!」

長良「落ちますね」ヒューゴン

高雄「こいつは、やられたな」

リツコ「さすがは冬月副指令。見事だわ」

ミサト「後は見るしかできないってわけね…」

冬月『人工的なリリスの再現。そして黒き月の槍への強制流用。舞台は整えた。あとの大詰めはどう演じる。碇』

青葉「艦首甲板上に侵入者を確認！」

ミサト「碇指令：!？」

その頃ネルフ本部長

マリ「ごめん姫。まさに懺悔の極み。この場合は、一時後退しかなさそうねってデカッ！」

艦首甲板上

ミサト「ご無沙汰です、碇指令。」

ゲンドウ「これまでご苦労だった。葛城大佐。この船は予定どおり私たちが使わせてもら」シユツカンツ

リツコ「…」

ゲンドウ「君か。問答無用とは、あいかわらず目的遂行に關し躊躇がないな」

リツコ「ええ。あなたに教わったことです」バンツバンツバンツ

ゲンドウ「…神に障壁はない。来るものを全て受け入れるだけだ」

ミサト「碇ゲンドウ。ネブカドネザルの鍵を使い望んで人を捨てたかつ。」

ゲンドウ「この世の理を超えた情報を、自分の体に書き加えただけだ。問題はない。この後に2号機が飛んでくるが、それも問題はない」ドンツ

ミサト「！」

ゲンドウ「私が神を殺し、神と人類を紡ぎ…使徒の贄をもつて人類の神化と補完を遂させる。」

ミサト「そのためにアスカを使い捨てるか、錠ゲンドウ！」

ゲンドウ「綾波と式波型パイロットは元よりこのために用意されていたのだ。問題ない」

リツコ「第13号機が！」

シンジ「問題大有りだぜおっさん！」ゲシィッ

ゲンドウ「!?」バァンッ

さて、飛び出して来たのは良いものの、どうすれば良いんだおい。とりあえず、銃で撃たれても死なねえやつに俺の空手は通用しなさそうだな。とにかく焦りすぎてヤクザキックで吹っ飛ばしちまったけど、これ俺どうすれば良い!? どうすれば正しくあいつを殺せる!?! いや、殺すはダメか。うん。じゃあ、どうすれば良い!? とりあえず13号機は白くなりやがったし! 変な槍が変な穴に入って紫色のデカイ変なの出してたし!

リツコ「これが人類…いえ、この星の古の生命のコモディティ化!」

ミサト「全ての魂をコアに変え、エヴァインフィニティと同化させる…フォーサインパクトの始まりか!」

ゲンドウ「…そうだ。セカンドインパクトによる海の浄化。サードによる大地の浄



化。そしてフォースによる魂の浄化。エヴァインフィニティを形作るコアとは、魂の物質化人類という種を捨て、その集合知を汚れなき楽園へといざなう最後の儀式だ。セカンドインパクトと引き換えに自らの仮説を実証した君の父上。葛城博士の提案した人類補完計画だよ」

シンジ「なげえわ！」ゴキイツ

リツコ「腕挫十字固！」

ミサト「…父の世迷言は必ず止めてみせます」

ゲンドウ「知恵の実を食した人類に、神が与えた運命は二つ。生命の実を与えられた使徒に滅ぼされるか、使徒を殲滅し、その地位を奪い、知恵を失い、永遠に存在し続ける神の子と化するか。我々はどちらかを選ぶしかない。ネルフの人類補完計画は後者を選んだゼーレのアダムスを利用した、神へのはかないレジスタンスだが果たすだけの価値のあるものだ」

リツコ「私たちは神に屈した補完計画による絶望のリセットではなく、希望のコンテニューを選びます」

ミサト「私は神の力を持ち克服する人間の知恵と意志を信じます」

ゲンドウ「真理に対する捉え方の違いだ。葛城大佐には世界が。赤木君には幸せの形が見えていない。人の思いっは何も変わらんよ。」

シンジ「知るかボケっ!!」ゲシイッ

ゲンドウ「フンッ…これで全てのホースマンは揃った。」

ミサト「シンジ君危ない!」

ゲンドウ「カッ

シンジ「ぬおあ!?!」ドカァンッ

ゲンドウ「では、預けていたエヴァ初号機を返してもらおう」

シンジ「待てやクソ親父!」

ゲンドウ「親父?」

シンジ「浮くなおいコミュ障!!」

ゲンドウ「…」

シンジ「おい!!!」

## 第21話

ヴンダー甲板

リツコ「碇ゲンドウが向かったガフの扉の向こうはヴンダーには手出しできないマイナス宇宙。残念ながらヴィレには補完計画を止める術はない…万事休すね。」

シンジ「おい酒…ミサト。俺がエヴァに乗る」

ミサト「え…?」

シンジ「つーかまってマリって奴が乗ってるエヴァなんか食ってない?」

ミサト「え!!」

ヴンダー横腹

マリ「らああああ!!」ガブツ

エヴァオツプフアータイプ「!」

マリ「よし、腕移植完了!」

甲板上

シンジ「えーと…お前が親父の世迷言を止めるって言うんだったら、俺も親父の世迷

言を止めるために動く…ダメ？」

ミサト「そのためには、碇ゲンドウと戦うことになるわよ。」

シンジ「俺は俺でやりたい」

ミサト「そう…これを着けてくれる？」

シンジ「うっわまたこれか」カチツ

北上「ちよつとやめてよ！冗談じゃない！まさかエヴァに乗せるつもりじゃないですよね？」

シンジ「ちよ、ちよつとミサトさん？これはあんまりじゃないですか？」

北上「こんなことになるんじゃないかと思つてた…館長。この状況なら無許可発砲許可でしたよね。疫病神！あんたの起こしたニアサーのせいで、私たちの人生めっちゃくちゃよ！全ての元凶、あんたら親子だけは絶対に許さない！」バンツ

シンジ「ふおっ!?!ちよつとガチで殺しに来てません??後何で俺とゲンドウを同一視しちゃつてんの？気狂いか?！」

つてちよつと待て、今撃つたの誰だ？あの気狂いピンク髪じゃなかった。銀色金色桃色の桃色じゃなかった。誰だ、今誰が撃つた？と言うより、何で撃つた??艦長こつちにいるんだぞ？艦長盾にすることだつてできるのに何で今撃つた??気狂いか？少なくとも正気じゃねえよな??おい、今撃つた奴誰だ。素直に出てきたら俺の正拳突きで許して

やる。出てこい。何でセリフよりも先に拳銃が出てくるんだ。

サクラ「碓シンジはエヴァには乗りません：碓さんはエヴァに乗って、みんなを不幸にして：自分自身も不幸になったんや。だからもう、碓さんはエヴァには乗らんのです」

シンジ「何だこいつ解釈違いが起こつた古のオタクみてーな反応すんな。だが残念俺はエヴァに」

サクラ「無茶言わんといて！碓さん怪我したら、もう乗らんで済みます。痛いですがエヴァに乗るよりはマシですから我慢してください！」バンツ

シンジ「んのっ!？」 シュンツ

北上「避けた：!？」

シンジ「あつぶなためー：俺の将来のためを思つてのことだろうがな、お前そんなことしたら皆んなの将来潰れんだぞわかつて」バンツ

ミサト「ぐっ！」

シンジ「ちよつと待て何で今撃つた?？」

リツコ「ミサト!!」

シンジ「おい大丈夫か!?洒落にならんぞ今の!!」

ミサト「いいのよシンジ君。14年前、あなたがエヴァ初号機に乗らなかつたら、私

たちはその時すでに滅んでいた。だから感謝しているの。その結果、ニアサーが起こされたとしても。シンジ君のたった行動の責任は全て私にあります。」

シンジ「お前いい奴すぎないか？すまん今まで酒樽だなんて言つてて。本当にごめんなさい」

ミサト「現在も碓シンジは私、葛城ミサトの管理下にあり、これからの彼の行動の責任を私が負うと言うことです。私は、今のシンジ君に全てを託してみたい。」

サクラ「…っそうや！碓さんは私らを救ってくれた恩人や！けどどちらのお父ちゃんもニアサーで消えてもうたんやぞー！碓さんは恩人で敵なんや！もうこうするしかないんや！」バンツ

シンジ「こわっ!?!…いやいつあんなメンヘラ手に入れたんですか艦長」

ミサト「キツイわね…」

北上「もういい！もういいよサクラ」

…え、何がもういい？何も良くないよね？どれくらい良くないかって言うと、お前今自分がやろうとしたことを他人に取られた上、それを止めるって言うクソ嫌な役回りなのにもういい？全然良くないよな??こわっ、人間の思考回路怖っ。こりや碓ゲンドウもコミュ障になるわ…いや、あいつはアレだ。会話1行日記が神様になったことでちよつと悪化したのに少し長く喋れるようになっただけだ。むしろタチが悪い。

北上「もう、明日生きて行くことだけを考えよう」

サクラ「もう…何やの…」

マリ「めんご！準備に手間取っちゃった。さあ、行こう。シンジ君」

リツコ「マヤ、艦長室に置いてあるプラグスーツを」

シンジ「何で置いてあんの？」

ミサト「…」

日向「確かに…」

数分後

シンジ「全く、またこれを着ることになるとはな」

リツコ「最も、それを着ても起動しないと思うけれども、ね。」

サクラ「弾はすぐに溶けます。今応急処置をしますから」

ミサト「大丈夫よ少尉…碇シンジ君。父親に、息子ができることは、肩を叩くか、殺してあげることだけよ。」

シンジ「実体験ですか？」

ミサト「加持の受け売りよ」

シンジ「そうだなー。リョウジ君はあのヒゲと違ってスタンガンとか持ってなさそうだし」

ミサト「…元気だった？」

シンジ「そりゃパワフルに。」

ミサト「そう…よかった。」

シンジ「まあ、あつちは俺のこと嫌いだらうけど、俺はあいつのことが断然親父より好きだな」

ミサト「ありがとう…必ずサポートする。頼むわ、シンジ君。後加持君に対して結構辛辣ね」

シンジ「そうですかね？ほいじや、行つてきます」

ミサト「行つてらっしゃい…では、仕事をしましょうか」

リツコ「艦はボロボロ、主機も補機も失つたまま。こうして浮いてるだけでも奇跡ね」  
ミサト「それで結構。予備動力が尽きる前に更なる奇跡を起こすわよ」

マイナス宇宙

マリ「オーバーラッピング対応型の改8と、アダムスの器を取り込んだプラスフォーインワン状態のおかげで、この裏宇宙でも難なく進めてる。ありがたいことだにや」

シンジ「さて、俺がやることは。L結界をどうにかして浄化してコア化されずに済ませてる機械がぶつ壊れる前に親父のエヴァをぶつ壊して逆転ハッピーエンドにすればいいってわけね」



マリ「さすがシンジ君。しっかし、さすがはゲンドウ君。裏宇宙なのをいいことに、量子テレポートを繰り返してる。こりや捕まえるのに骨が折れそうだよ」

その辺は大丈夫。ご安心したまえよ。この俺が全てを解決する。裏宇宙ってのはアレだろ。なんかあんまり見たくない景色だけど、量子テレポートの原理も知らねーけど、初号機の中にはあの綾波レイさんがいるわけだ。あいつがなんとかしてくるってばよ。裏宇宙はよく知らんが、碇ゲンドウがテレポートできるんだし、初号機に乗って色々やって、俺だけを出しやがった綾波レイも同じようなことできるだろ。要はエヴァと一体化した奴勝ちなんだろ？分かってるって。

シンジ「…大丈夫だ。なんとかなる。出てこい綾波」

マリ「そうきたかニヤ：第13号機の中に姫の魂が残置されてる可能性がある。だから姫：…アスカをお願い！」

シンジ「やってやらあ。」

マリ「君がどこにいても必ず迎えに行く。だから、絶対に：ウツソ今の瞬間で閉める!? あーもう分かってないにやー綾波タイプは！」

…なんか、非難の声が聞こえるぞ：クソツテレポーターションだと思つたら少し歩く必要があるのがすごい癪だ。そこら辺化学でなんとかしろってんだばーか！

ゲンドウ「もう良いのか？レイ」

シンジ「てめー、テレポートさせるなら歩く必要なくせってんだ。」

綾波「碇君。ごめんなさい。碇君をエヴァにのらせないで済むように出来なかった」

シンジ「謝罪そっち？…まあ良い、続きは俺がやる。退け」

綾波「うん。お願い。」

シンジ「さーやってやるぜ！」

ゲンドウ「ぐっ…初号機パイロットが覚醒したか…」

ヴァンダー

マヤ「改8経由でマイナス宇宙から信号を受信！エヴァ初号機、再起動！」

北上「あり得ないっしょ!?疫病神のシンクロ率はゼロなのに！」

リツコ「まさかシンジ君の本当のシンクロ率はゼロではなくそれに最も近い数値？」

マヤ「はい。シンクロ率、無限大です」

北上「なにそれ？」

リツコ「分からないわ。ただ、今の彼…ものすごく強いわよ」

## 第22話

マイナス宇宙

シンジ「槍はもらったあ！」ゲシイッ

ゲンドウ「っ…ほう、希望の槍カシウスに変わるか。」

シンジ「俺の知ってる槍とは違うが、これが多分カヲルの奴が言ってたもう一本の槍だな…っ！かもやめろジジイ」

ゲンドウ「ダメだ、私には成すべきことがある！」バンッ

シンジ「弱い!!」バーンッ

ゲンドウ「っ…！何故だ!？」

シンジ「お前吹っ飛ばしたら変な世界に突入したぞおい!？」

あ、今の銀河系じゃね？ここ裏宇宙だから一応銀河系もあるのか!?そしたらここって裏銀河系って呼ぶのか？そもそも裏宇宙って宇宙の裏にあるだけでは？色が裏ってことなのか？とにかく認識し難いものばっか流れてくる背景さっさと変われよ…っって待て？ここに槍が2本あったら不味いのでは？いや、これなかったら俺が死ぬか。じゃあ

良いかな。

ヴンダー

北上「アナザーインパクトまで無理やり起こして、あの男はなにがしたいんですか？」  
リツコ「アナザーの目的として考えられるのはただ一つ。フォース用に槍を新造し。  
アレイショナルのために2本の槍を最後まで温存したのよ。恐らく、たった一つの願いのために」

裏宇宙

シンジ「どーせお前の願いはアレだろ！母さんに会いたいとかだろ!!」

ゲンドウ「何を言う…シンジ、先ほどの力は予想外だったが、所詮は初号機。第十三号機に力では勝てないのだよ」

シンジ「シンクロ率が高ければ強くなるんじゃないのかよ…クソツ…なんだあれ？」

ゲンドウ「ゴルゴダオブジェクトだ。人ではない何者かが」

シンジ「隙ありい！」グッ

ゲンドウ「アダムスと6本の槍と共に神の世界をここに残した。私の妻、お前の母もここにいた全ての始まり。約束の地。人の力ではどうにもならない」

シンジ「頭突きたい！」ドンツ

ゲンドウ「…運命を変えることができる唯一の場所だ」

嘘だろゲンドウ。俺の動きが完全に封じられてやがる。どんな化け術使った？つーか運命を変えることができる場所なら『全人類が袋菓子を開けるときに手間取らない』とか書いとけ！不親切な人ではない奴だな！いや待てよ、碇ゲンドウがなんとかかんとかの鍵で強化されてるとしても、運命を変えるにはこのゴルゴダオブジェクトって奴を使わにやならんのか？すげーなゴルゴダオブジェクト。ほんとすっげえ。

病院（裏）

シンジ 「っ!?!景色が一瞬で変わった…!?!」

エヴァのケイジ

シンジ 「まただ！何だ、何だここは!?!」

ゲンドウ 「お前の記憶の世界だ。マイナス宇宙を我々の感覚機能では認知できない。ゆえに、LCLが知覚可能な仮想の世界を形成している。大人しく初号機を渡せ。そうすれば、お前も母に会える。」

シンジ 「父親に返せって言われて返す反抗期の子供がいると思うか？」

ゲンドウ 「無駄な抵抗を試みるか。これだから子供は苦手だ…」

第三新東京（夕）

ゲンドウ 「仕方がない。回り道をしよう。」

シンジ 「回り道こそが最短の道だよ…!」

さーて勝負はここからだ。まるでウルトラマン対ウルトラマンのような戦いをしてやるぜ。ヴァンダーの奴らに見せてやれないのが残念なくらいの、とびきりすごいスペシャル光線の撃ち合い並みに激しい戦いをな。互いに武器は槍。性能はパイロットと機体含めて相手のほうが上。あれ、これ俺勝てるか?…まあ、第九の使徒よりはマシか…いや、4本の腕だしプラグ食った気がするし、実質第九の使徒が武器持つてるだけでは?

シンジ「…絶望の槍如きで勝てると思うなよ?」

ゲンドウ「戯言を!」ブンツ

シンジ「足元がガラ空きだ!」ゴンツ

ゲンドウ「っ!…なんだと…」

シンジ「俺が防戦一方になるとでも思っていたか?一言も攻撃しねえなんて言ってるぞ。」

ゲンドウ「その性格…ユイを思い出す。だからこそ、シンジ。貴様は!」ドンツ

シンジ「その二つの突起した部分が仇となったなゲンドウ!」ガンツ

ゲンドウ「それはどうかな!」ググツ

シンジ「ちよつとそれはあまりにも吐き気を催すって言いますかねえ!」ズルズル  
ゲンドウ「初号機を渡せ!」ゴンツ

シンジ「俺に対して拳で来るか！舐めやがって!!」バギイツ  
ゲンドウ「ぐっ…!捕らえた!」ブンツ

シンジ「俺の巴投げか!」ドゴオンツ

しかし残念だったな碇ゲンドウ！槍はまだ俺が持っている!!…いや、少しキツイか。まさか空手まで真似されるとは。姿形から入った奴がここまで真似してくると思わなかつたぜ…

シンジ「ぐあっ…!」

ゲンドウ「ふんっ!」スツ

シンジ「A・T・フィールドお!」キイイインパリンツ

ゲンドウ「A・T・フィールド如きで!」

シンジ「嘘だろお前っ!」ガシツ

ゲンドウ「何を…ぐあああ!」ブンツ

シンジ「巴投げどころかただただ投げてるだけじゃねーか!」ゴンツシユルルツ

ミサト宅（シンジ宅）

シンジ「ここでやんのかよ…足の踏み場に気をつけるよゲンドウ!」スカツ

ゲンドウ「無駄だ!」キインツカンツ

シンジ「上に飛び上がればこつちのもんよ!」ビヨンツ

ゲンドウ「ぬう！」ゲシイッ

シンジ「はぐあっ!?」バギイッドンッ

2年A組

シンジ「学校つてのは危険物が多くて怖いもんだぜ！」ブンッ

ゲンドウ「ふんっ！」ブンッ

シンジ「嘘だろおまつ!?」ガギイッ

綾波宅

シンジ「ここは綾波の家か…」

ゲンドウ「っ！」ブンッ

シンジ「もう喋るネタ無くしたかゲンドウ！」ガギイッ

ネルフ本部長

シンジ「せいっ！」ガギイッ

何だ、何だよこいつ！俺の動きがまるで筒抜けだ！全部あいつと一緒に行動を俺がしているのか!?それとも、俺があいつと一緒に行動をしているのか!?どっちだ、どっちなんだ!?俺か!?あいつか!?それともただただまたまたただただだけか!?なんかさっきの一文たが多いな、ややこしい！俺と同じ動きをするってことは、つまりアレだ！俺が右から攻撃するとき、あいつは俺の左側に攻撃を仕掛けるってことだな！



スイカ畑

ゲンドウ「第十三のエヴァ。希望の初号機と対を成す絶望の機体だ。互いに同調し、調律をしている。これも私に必要な儀式だ、シンジ。」

シンジ「どこまでしつけーんだゲンドウ！つてああ!?」ゴンツ

ペンペンがいた場所

ゲンドウ「無駄だ、お前のひ弱：とは言えないが、私より弱い力では私を止めることはできない！」ブンツブンツブンツ

シンジ「うおっ!?あっ!?どあっ!?」ザッパーン

第三新東京（昼）

シンジ「助走付きでやったらどうだあ！」

ゲンドウ「まだ分からないか！」ガシツブンツ

シンジ「ほがあっ!?」

第三村

シンジ「んのかつく！でえい！」ゴンツ

ゲンドウ「力でも敵わない」ガシツ

シンジ「甘い！」ゲシイッ

ゲンドウ「んぬううっ：妙な考えを：しかし、暴力と恐怖は我々の決着の基準ではな

い……」ブンッ

シンジ「投げ技ばかりとは芸のない！」

ゲンドウ「これは力で決することではない。話をしよう。シンジ。」

ゲンドウと冬月がいた広い部屋

シンジ「ゲンドウ。お前はここで何がしたい？」

ゲンドウ「このゴルゴダオブジェクトでしか起こし得ないアデイシヨナルインパクトだ」

シンジ「まーた知らん単語出てきたな。テメエ京都の理系出身だろ」

ゲンドウ「…それが私の神殺しへの道へとつながる。そのために最後の2本の槍をここに届けた。」

ヴンダー

リツコ「やはり、碇ゲンドウが槍を2本とも使い捨てる可能性が高いわね」

ミサト「槍を全て失うと、シンジ君が発動を止める術も失ってしまう…わたしたちで新たな槍を作り、彼の元へ届けます。」

北上「できっこない！それこそどうやって」

ミサト「本艦がヴーセとして乗っ取られていた時、艦体は黒き月をマテリアルとして見知らぬ槍を生成していた。ならばこの艦を使って新たな槍を私たちで作らせるは

ず。」

リツコ「無茶言うわね。サンプルはさっきの発動データしかないのよ」

ミサト「リツコには十分でしょ」

リツコ「…そうね。やってみるわ。要は脊椎結合システムにありそうよ。マヤ、ぶっつけ本番でいくわよ」

マヤ「ノープログラムです。副長先輩。いつものことですから」

ミサト「…悪意のない一言って少しキツイわね…」

マヤ「虫の入った料理でない限りは」

脊椎結合システム部分

「整備長！幸い、予備動力と脊椎結合ブロックは無事です！ここで直接、組み替え作業しちゃいましょう！」

マヤ「ダメよ！あなたたちは退避して！ここにいるだけで危ないのよ！」

「最後の奉公です！」

マヤ「…これだから、若い男は…」

リツコ「さあ、碇司令が何かやらかす前にシンジ君をサポートするわよ」

マイナス宇宙

ゲンドウ「初号機パイロット。お前に見せたいものがある。」

なんだ？今更母さんへのラブレターとか恋文とか出されても俺は読まないし読む気もさらさらないぞ。いや、今のこのタイミングではないな。俺の記憶にないし。さーてどこへ行くのかな。まあ背景が急に変わるんだろうけどさ……ん？こりや……キリストみてーな格好で釘付けられてる……初号機……？初号機っばい黒い何かだ……いや、初号機っばい黒い何かって、なんだ……え、何それ怖い。

シンジ「黒い初号機がどうした？」

ゲンドウ「お前の記憶ではそう映るのか。まあ無理はない。初号機は他とは違いリリスを使っている。そして、本来であればシンジ。お前は第六の使徒と戦う前にリリスを見ている。」

シンジ「リリス？……いや、知らねえけど」

ゲンドウ「まあいい。エヴァンゲリオンイマジナリー。葛城博士が予測した現世には存在しない想像上の架空のエヴァだ。虚構と現実を等しく信じる生き物、人類だけが知できる。絶望と希望の槍が互いにトリガーと贄となり、虚構と現実が溶け合い全てが同一の情報と化す。これで自分の認識、すなわち世界を書き換えるアディショナルインパクトが始まる。」

シンジ「なげぞおい。30文字で言え。」

ゲンドウ「30文字に簡略化するなど、いくら私でも無理だ。」(23文字)

シンジ「チツ」

## 第23話

マイナス宇宙

ゲンドウ「私の願いが叶う唯一の」

シンジ「お前もう黙ってる」

その頃セカンドインパクト爆心地

北上「これが：アデিশヨナルインパクト？」

リツコ「ええ。恐らくあれがエヴァイマジナリー。まさか実在するとはね」

北上「変よ！これ！絶対変！うわっ瞬きした！！人でしょこれ！！」

リツコ「いいえ、エヴァイマジナリーよ。」

北上「そこで意地を張らなくても!？」

リツコ「あれが現実に出てきたと言うことは、かなりヤバいってことよ。急いで。」

北上「それは分かってます！」

裏宇宙

シンジ「あーくっそ。こいつと会話したせいでインパクト起こっちゃったぞおい」

どうするよ。つーかこれどう帰るのよ。て言うか、碇ゲンドウと心中するなんて嫌だぞ。ヴァンダー応答してるかな。サポートするって言ったからしてくれるよな。流石にこのまま父親と二人でランデブーは嫌だぞ。なんか嫌な予感がするし。ゲンドウがなんかブツブツ言ってるし。なんだよ表の宇宙に存在しているなんてら全員人体になってるのか。なんとたらってなんだよ。人体になってるってことはつまりあれだろ。人じゃねーんだな？

ゲンドウ「あと少しで会えるな、ユイ」

シンジ「黙れ！」

NERV戦艦

冬月「ふむ：ようやく始まったな。」

マリ「にやんにやんにやんにやにやーん」

冬月「君か」

マリ「お久しぶりです。冬月先生。しっかしこの船の中、L結界密度が高すぎません？死んじやいますよ？」

冬月「ああ。元来有人仕様ではないからな。無理は承知だ。」

マリ「さすがは冬月先生。」

冬月「人には常に希望という光が与えられている。だが希望という病に縋り溺れるの

も人の常だ。わたしも碇も希望という病にしがみつき過ぎているな。」

マリ「ゲンドウ君は、自らが補完の中心になることで願いを叶えようとしている。それを助けたい。いえ、願いを重ねる冬月先生の気持ちもわかりますが人類全てを巻き添えにするのは御免被りたいニヤ。」

冬月「…だろうな。私の役目は終わりだ。君が欲しいものは全て集めてある。あとは、よしなにしたまえ。イスカリオテのマリア君。」

マリ「フフツ：超久しぶりに聞いたな、その名前。では、おさらばです。」

冬月「…ユイ君。これでいいんだな。」

マリ「ほら言わんこつちやない。私もさっさと出よつと」

ヴンダー

マヤ「動きました！これで行けます！」

リツコ「艦長。あとはここにいるクルーで十分よ。」

ミサト『了解。総員退艦。』

青葉「え、これ俺が…総員退艦！繰り返し返す。総員退艦！負傷者収容を最優先！脱出力

プセルに逃げ！」

リツコ「貴方、今まで碌な立場に居なかつたわね」

青葉「まさかここから言うことになるだなんて…」



セカンドインパクト爆心地上空

マリ「アダムスの器たるエヴァオツプファータイプが勢揃い。さすが冬月先生。手際がいいニヤ！」

オツプファー「キキヤラ…」ピカーンッ

マリ「悪いけど！オーバーラッピングのための！糧になってもらうわ…よ！」

8号機「うごあ！」

マリ「これで8プラス9プラス10！」

オツプファー「！」ヒュンッ

マリ「後ろから襲えば良いとでも！」

8号機「ゴアア」バクッ

マリ「プラス11！さあ、ラスト行ってみようかあ！」

ヴンダー 脱出カプセル

長良「やつぱり私、操艦席に戻ります」

高雄「今は生き延びるのが俺たちの仕事だ。どれだけ辛くともな。」

長良「…っ」

操艦席

リツコ『艦長。組み替え作業を完了。これで行けると思うわ』

ミサト「了解。全ての操艦システムを艦長席へ。その後速やかに退艦して。」  
リツコ『ミサト?』

ミサト「これは誰かが確実に発動させなければならぬ。そして本艦の責任者は私です。生き残った命を…子供たちを頼むわ、リツコ」

リツコ『分かつてる。ミサト。ベストを尽くすわ』

ミサト「ありがとう…予備電磁力は残り僅か。やはり、最後に頼るのは昔からの…反動推進型エンジンね!」ポチツ

その頃マリ

マリ「…もうリリンが君らを使うこともない。ゆっくり眠りな、アダムス達。ヴンダーが動き出した。合流を急ぐかニヤ…しかし、人類のフィジカルとメンタル両方の補完を発動させるとはまあ…ゲンドウ君。君は…どうしようもない奴だにや。」

裏宇宙

シンジ「お前は何を望んでこれやってんの?」

ゲンドウ「お前が選ばなかったA・T・フィールドの存在しない全てが等しく単一人類の心の世界。他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も悲しみもない。浄化された魂だけの世界。そして、ユイと私が再び会える安らぎの世界だ。」

なんだ、こいつ。奥さんのこと大好き過ぎた人間の末路か。そして俺のお父さんだ。

こいつの遺伝子を一割とて受け繋ぎたくないな。唐突にユイユイユイユイ言い出したしき。ん？と言うことは、こいつは母さんと会いたいのか？何人かから聞いた話では俺と同じように気が短く荒い人間だったらしいけど……こいつがそんな女を好きになるか？え、怖。そして綾波が母さんのクローンだから……いや、クローンだからって性格までは遺伝しないか。そんでまだこいつブツブツ言ってるよ

ゲンドウ「ここにいるのは全てレイか？どこだ？どこなんだ？ユイ！」

シンジ「うっわ醜い……もうやめろよ……」

ゲンドウ「なぜだ？なぜシンジがここにいる？」

シンジ「お前のことを知ってから打ちのめしたいから。どんだけムカついても、どれだけ腹を立てても、お前には近づかなかった。自分の父親がどんな人間かはつきりするのが嫌だったんだ。でも今ははつきりさせたい。」

ゲンドウ「？A・T・フィールド？人を捨てたこの私に？まさか、シンジを恐れているのか？この私が？」

シンジ「全く綾波も妙な物を渡す。ほれ、お前のだろ。渡す物だって綾波に教わったしな。」スッ

電車の中（エヴァの中）

シンジ「俺と同じだった……のか？」

ゲンドウ「まあ…そうとも言える。ヘッドフォンが外界と私を断ち切ってくれる。無関心を装い、他人のノイズから私を守ってくれた。だが、ユイと出会いわたしには必要がなくなった。お前の名前候補を言っただけで微笑んでいたよ。」

シンジ「小学校の授業みてーなこと聞いてねえんだよ…」

ゲンドウ「親の愛情を知らない私が親になる。やはりこの世界は不安定で不完全で理不尽だ。世の中は他人の言葉通りに受け取ってもうまくいかない。その時々で人は違うことを言う。」

シンジ「建前と本音かな？」

ゲンドウ「どっちが本場で、どっちに合わせて良いのかわからない。多分、どちらもその人には本当なんだろう。その時の気持ちが変わりだけだ。私は、人との繋がりを恐れた。人で溢れる世界を嫌った。幼い頃から孤独が日常だった。だから、寂しいと感じることもない。だが、世間にはそれをよしとしない人間もいる。他の家に行くのが苦手だった。興味のないクラスメイトや親戚の家に連れて行かれてその生活の情報や実行を押し付けられるのが嫌だった。他人といるのが苦痛だった。私は常に独りでいたかったのだ。」

シンジ「ぼっちガチ勢みたいだなお前本当。」

ゲンドウ「子供の頃から好きなものが2つあった。一つは知識だ。一方的に得るだけ

の知識は私の心の飢えを満たしてくれた。知識に気遣いは不要だ。時間のある限り、私の中に好きなだけ与えることが出来るからだ。もう一つはピアノだ。調律された音は鍵盤の正しい音を返してくれる。そこに嘘はない。裏切りも失望もない。私を粛々と音の流れに変換してくれる。そのシステムが好きだった。一人が好きだった。私も他人も誰も傷つくことがない。独りが楽だった。だが、ユイと出会い私は生きることが楽しいと感じることを知った。ユイだけがありのままの私を受け入れてくれた。ユイを失った時：私は私一人で生きる自信がなくなっていた。初めて孤独の苦しさを知った。ユイを失うことに耐えることができなかつた。ただ、ユイの胸で泣きたかつた。ただ、ユイのそばにいて自分で自分を変えたかつた。ただ、その願いを叶えたかつた。私は、私の弱さ故にユイに会えないのか。シンジ。」

シンジ「なげーな：その弱さを認めねーからよ！どんな物事も自分のいる地位を認めてからこそ始まるってお前んとこの婆ちゃんが言ってたしな！つーか、言われてただろ。あんたも。」バゴーンツ

ゲンドウ「なんだ？」

その頃表宇宙

ミサト「んーっ！」ギユオオオオオオオ

マリ「かなりきつそうニヤ。」バアンツ

ミサト「まだまだだあ！このまま貫くまで！！そしてえ！今！」カチツ

裏宇宙

ゲンドウ「馬鹿な！聖なる槍は全て失っている！世界を書き換える新たな槍はありえないはずだ！」

シンジ「これが世界を元に戻したいと言う意志の力よ！槍さつさとよこせ！！」

ゲンドウ「なんだと？」

表宇宙

ミサト「よっしや貫いたあ！そして取りついた！マリ！シンジ君を！」

マリ「あたぼうよ！必ず連れて帰る！」

ミサト「頼むわ！」ガチツ

マリ「あいよ！」

ミサト「…ごめんね…お母さん、こんなことしかできなかった…」

マリ「聞こえてるよー！」

ミサト「！！うっ、は、速く行って！！」

裏宇宙

ゲンドウ「ユイに会えぬまま、新たな槍がここに届くか。残念だ。」

シンジ「ヴァンダーが逝ったか…感謝するぞ…さ…ミサトさん…」

ゲンドウ「他人の死と思いを受け取れるとは……大人になったな、シンジ。ユイを再構成するためのマテリアルとして、シンジが必要か否か。最後まで分からなかった。願いを叶えるには報いが伴う。子供は私への罰だと感じていた。子供に会わない。関わらないことが私の贖罪だと思ひ込んでいた。その方が子供のためにもなると信じていた。すまなかつた。シンジ。そうか……そこにいたのか。ユイ」

シンジ「電車を降りたか……最後の最後でグラサン外さずに行つたなあ親父。」

カヲル「碓ゲンドウ。彼が今回の補完の中心、円環の元だ。ここからは僕が引き継ぐよ。碓シンジ君。君は何を望むんだい？」

なんだこいつ!?!どつから現れた!?!いや、綾波と一緒に。初号機の中に綾波がいた、13号機の中に死んだこいつの魂が居た……それだけだったか。ゲンドウが13号機に一人で乗つても大丈夫だった理由の一つがこいつかな。まあどう考えてもこいつが協力するとは思えんがな。俺が乗れるんだ、父親である碓ゲンドウが乗れても問題はないのか?なんか嫌だな。加齢臭が臭いそうで。寄るな、2m以上離れる。

シンジ「そうだなあ、空手の世界大会で優勝した証かな。でもそれは自分で取る。取れると思うしな。俺よりもアスカとかを引きずり出さなきゃいかん。約束してるし。」

カヲル「そうだった。君はイマジナリーではなく、リアリティーの中で既に立ち直つていたんだね。」

シンジ「立ち直る以前の問題っつーか…まあ良いか。父親のやったことはさっさと俺が落とし前付けてエンドよ。おーい赤猿ー…出てこーい…おい、出てこねーぞ。」

カヲル「ダメダメ。ちゃんと名前で呼ばないと。」

シンジ「チツ…アスカー？」

アスカ『パパは分からない。ママもない。だから、誰も要らないのよ、アスカ。誰もいなくて良いようにする。そうしないと、辛いから。生きているのが苦しいから。エヴァに乗る。人に嫌われても、悪口を言われても。エヴァに乗れば関係ない。他に私の価値なんてないもの。誰も必要としない、強い体と心を持つ。だから、私を褒めて！私を認めて！私に居場所を与えて！ホントは寂しい。ホントはただ頭を撫でて欲しかっただけなの。』

シンジ「ケンスケ、出番だ。」

ケンスケ『ここまで入ってくるか…良いんだ、アスカはアスカだ。それだけで十分さ。』

アスカ「っ…私、寝てた？シンジ…」

シンジ「よし、また会えたな。これだけは伝えておかねばなど。ありがとなー。俺が一番強いって認めてくれてよ。お前は二番目くらいだったな。」

アスカ「何よ。そこは、『俺もお前の強さを認めてたよ』とか言っておあげるものじゃない



いのかしら？」

シンジ「バカが、二度目は助かったんだし良いだろうよ。そんじやなアスカ。ケンスケによろしく言っとけ。」

マリ「お達者で。」

13号機プラグ内

アスカ「っ?!?…え?な、何今の!?!」バシユウウウンツ

カヲル君のピアノの場所

カヲル「行っちゃったね。寂しくないのかい?」

シンジ「舐めてんのか。次はお前だぞ。覚悟しろ。」

カヲル「怖いな。シンジ君は。」

海辺

シンジ「思い出したぞ。何度もここに来てお前と出会ってる。」

カヲル「生命の書に名を連ねているからね。何度でも会うさ。僕は君だ。僕も君と同じなんだ。だから君に惹かれた。幸せにしたかったんだ。」

カヲル君のピアノの場所(夜)

シンジ「へー、ってことはゲンドウ≡俺≡カヲルってことだから、カヲル≡ゲンドウってことだな。だから同じエヴァに乗ったのか。成程。」

カヲル「まさか、会話の中に記号を使ってくるだなんて…君らしい。」

シンジ「カヲル。13号機のことなんだが、処分しようと思ってる。」

カヲル「うん。エヴァを捨てるか…すまない。」

何がすまないだ。すまなく思ってたんなら自分で処理しろ。バーカバーカ。お前のせいで世の中はニアフォーズだとか、サードの続きだとかでそりやもう大変だったんだぞ。わかつてんのか。何回、何回俺がああ親父を殴ろうとしたか分かるのか。このバカめが。でもこいつのせいで助けられたせいで気分が複雑だ。迷路並みにな。

カヲル「僕は君の幸せを誤解していた。」

加持「ええ。それは、あなたの幸せだったんです。渚司令。貴方はシンジ君幸せにしたいんじゃない。それにより、貴方が幸せになりましたかつたんです。」

カヲル「僕の存在を消せるのは真空崩壊だけだ。だから僕は、定められた沿岸の物語の中で、演じることを永遠に繰り返さなければならぬ。」

シンジ「仲良くなるためのおまじない、アクシユだ。」

カヲル「…相補性のある世界を望む。変わらないな、シンジ君は。」

加持「だからこそ、あなたが彼を選び、生命の書に名を書き連ねた。」

カヲル「ありがとう。リョウちゃんにも救われたよ。」

加持「光栄です。渚司令。」

渚司令「イヤだなりヨウちゃん。そろそろカヲルって呼んでよ。ほら、名前が渚司令になつちやつてるじゃん。」

加持「フツ…まだお預けです。渚司令。」

渚司令「いや、名前とかはもうお預けつてことじやry」

海洋研究所

加持「渚とは海と陸のはざま。第一の使徒であり、第十三の使徒となる人類のはざまを紡ぐあなたらしい名前だ。貴方は十分に使命を果たした。あとは彼に引き継いでもらつても良いでしょう。葛城と一緒に、老後は畑仕事でもどうです？」

渚司令「そうだね…それも良いね。あと名前」

撮影所

シンジ「さあ最後はお前だけだぞ綾波く。つてなんだその人形？」

綾波「私は、ここで良い。」

シンジ「お前と違う綾波は別の居場所見つけたぞ。アスカもどーせ居場所に気付いてないだけだしな。」

綾波「エヴァに乗らない幸せ。碇君にそうして欲しかった。」

シンジ「じゃあその幸せを今度はお前が選ぶ番だな！」

綾波「そう？」

シンジ「そうだ。俺も俺でエヴァに乗らない生き方を選ぶ！時間も…世界も…戻したいけど戻さん。エヴァがなくても構わん世界に書き換えるだけだしな。新しい、人が生きていける世界にな。」

綾波「世界の新たな創生。ネオンジエネシス。」

シンジ「それにな、後で迎えが来るってんだ。速く行ってもらわないと困るぞ、女性を待たせることになるからな。」

綾波「フフツ…分かった。碓君。ありがとう。」

シンジ「どういたしましたね。さあ、ネオンジエネシスとやらを行ってみようか！」  
裏宇宙

シンジ「まるで腹を切る侍だな…なんだこの手？」

碓ユイ「しっしっ」。パッパッ

シンジ「うおっ!?!…くっ…俺の中にいた母さんか…!?!13号機も…って、見送りたかったのかよ。それがゲンドウの願った神殺しね…」

初号機&13号機「うおおおおお!!」グサツメリツパーンツ

いやはや、変な光景だな。13号機が最後に力を加えてエヴァ全部を貫いてるよ。あ、これマリさん来るのか？マリさんのエヴァも消えそうでは？…き、気のせい…か？さつき初号機の肩みたいなやつが…え？ええ！？いつもエヴァ!?何!?俺の思ってたエ

ヴァって結構量が多いのか!? なんだ今の白ウナギ!? え!? ええ!? よ、よくわかんねーまま  
変なこと起こったんだけど!

シンジ「と、とりあえず、エヴァは全て消えた…のか?」

浜辺

マリ「とうちやくー! 間に合ったー!!」ザッパアーン

シンジ「ぬおっかつなっ!? ゴフツ! ゲホツ!」

マリ「ギリギリセーフ!」ピヨンツ

シンジ「うえっ…ん? あいつなんか飛び降りてね?」

マリ「(ありがとう、8プラス9プラス10プラス11プラス12号機。ご苦労様、最

後のエヴァンゲリオン。)」

シンジ「ちよ、おい…大丈夫か?」

マリ「昔のCMのような、水面から顔を出すシーン! やりたかったんだよねー! 何しろ海は入れないからさっ。さて、待たせちゃったね。シンジ君。」

宇部新川駅

シンジ「ぬおっ」

「間も無く、列車がまいります。危ないですから、黄色い点字ブロックまでお下がりください。」プアアアア

シンジ「…」

反対側のホーム、結構人いるな。さて、戻ってきたわけだが…いやーなんといいま  
すかね。うん。まさかこういう風に戻るだなんて。まあそれも良いか。とか思ってた  
ら後ろから目隠し。おい、誰だ？いや、誰だって言っても俺の知ってる中では一人しか  
おらんが。いや、俺が知らない間に俺の知らない同僚がいるかもしれない。それも考え  
て…んー…どうしようかな。

マリ「だーれだ？」

シンジ「うわびつくりした。」スカッ

マリ「あらら、はずれ…」スンスン

シンジ「犬みたいに嗅ぐんじゃない。」

マリ「汗臭いねー相変わらず。やっぱ、空手家って疲れる？」

シンジ「お前こそ相変わらずだ。似合ってるぞ、その服。」

マリ「ほほう…本人を褒めずにスーツを褒めるようになったって…」ピッ

シンジ「本当に誰でも取れるんだなそれ。」

マリ「さあ、行こう。シンジ君！」

シンジ「そうだな。行くぞ！」